

ハイデガー「1933／34年の学長職。事実と思想」

奥 谷 浩 一

訳者解説

以下に訳出するのは、マルティン・ハイデガーの小論“Das Rektorat 1933／34. Tatsachen und Gedanken”（「1933／34年の学長職。事実と思想」）の全文である。彼の息子ヘルマンがこれを刊行するにあたって付した序文も併せて訳出しておいた。

1983年にヘルマン・ハイデガーが、これまでは知られることのなかった父の「1933／34年の学長職。事実と思想」（以下、「事実と思想」と略称する）を、1933年5月27日に行われたフライブルク大学学長就任演説の復刻とともに、自らの序文を付して公刊した。原文にしてわずか23頁のこの小論「事実と思想」は、マルティン・ハイデガーがフライブルク大学学長に就任した前後の大学内の情勢、彼が学長職を引き受けた理由とその背景、とりわけ彼とナチ党との関係を、当事者である彼自身の口から語った数少ない記録として、きわめて重要な文書である。

この小論が書かれた経緯について詳細は伝えられていない。ヘルマン・ハイデガーはその序文のなかで、マルティン・ハイデガーは「1945年の挫折の直後に」この回顧録を書き、「彼は後に手書きの原稿を、しかるべき時期にこれを公表するようにと指示して、これを署名者に委ねた」と述べている⁽¹⁾だけである。オットー・ペッゲラーは、ハイデガーが第二次大戦におけるナチス・ドイツの敗北後、フランス占領軍の意向のもとにバーデン州につくられた非ナチ化委員会または政治的浄化委員会から査問を受けることになり、こうした「非ナチ化の過程のなかでこれを提出した」⁽²⁾と述べているが、実際に提出されたかどうかは不明である。

この小論が書かれた背景について簡単にまとめると次のようになる。フライブルクは、1945年5月にナチス・ドイツの第三帝国の野望が完全に潰えて無条件降伏を行う直前の4月22日にフランス軍によって占領され、フライブルク大学もただちにフランス軍事政府による政治的浄化と非ナチ化のための一連の措置を受けることになった。ハイデガーは、こうした政治的状況の変化とともに、アクティヴまたは典型的なナチと見なされていた多くの人々と同様に、同年5月に、彼がフライブルクに建てた住居の明け渡しと蔵書の接收を軍当局と市長から求められ

た。まずエルフリーデ夫人がこれに抗議して6月10日に市長に手紙を送り、ついでドナウ溪谷上流から戻ったハイデガーもまた7月16日に同じように市長に抗議文を書いた⁽³⁾が、自らの住居と蔵書の差し押さえというこうした危機的状況に迫られ、これを阻止しようとする行動のなかから、自分とナチとのかかわりを最小限度のものに見せかけようとする彼の自己弁護の基本路線が形成されたと考えられる。

この自己弁護は、同月創設された政治的浄化委員会がハイデガーを被疑者として尋問したのを契機に本格的なものとなった。ハイデガーは、フライブルク大学学長から学長時代のハイデガーがナチとどうかかわったのかを問われて、11月23日にこれに返事を書いた⁽⁴⁾。また12月にも大学内で厳しい事情聴取と査問を受けたハイデガーは、12月15日付けで政治的浄化委員会議長フォン・ディーツェ教授宛に手紙を書き⁽⁵⁾、またかつての友人ヤスパースにも所見を求めて彼からの弁護をあてにするという展開をたどることになった。ハイデガーの自己弁護と自己保身とは、こうした一連の非ナチ化の運動のなかで、さらに強固にされていった。このハイデガー「裁判」は、ハイデガー哲学の影響がフランス国内へと広がり始めたことを憂慮したフランス軍当局の思惑などもあって、結局のところ、1946年12月28日のバーデン州文部大臣による、ハイデガーに対する教育活動の無期限の停止、大学における職務の打ち切り、そして翌年末をもっての給与打ち切りという、きわめて厳しい通達内容によって決着がつけられたのであった。当初は状況を楽観視し、年金付きの名誉教授として退官するという条件を提出することで何とか妥協しようとしていたハイデガーは、完全に期待を裏切られることになった。こうした経過のなかで、ハイデガー自身によって何度か繰り返されたこうした自己弁明が、最終的にそのかたちを整えられ、そしてまたハイデガー自身による公式的見解として後世に伝えようという意図のもとに、小論「事実と思想」として仕上げられたと考えられる。

この小論は、内容から見ても、実質的に「ハイデガーの弁明」とも言うべき文書である。そしてそれは、ハイデガー派からは、1966年9月23日に行われたが、ハイデガーの遺志により彼の死後の1976年5月に雑誌『シュピーゲル』に初めて公表された対談⁽⁶⁾と並んで、ハイデガー自身の手になる「最も信頼すべき」文書として、ハイデガーとナチズムとの関係にかんする公式的見解としてオーソライズされ、そしてまたハイデガーのナチズムへの関与を最小限のものにとどめようとする見解のたえざる源泉としての役割を果たしてきたし、実際にハイデガーのこうした戦略は大きな成功を収めてきたと言ってよい。しかし、これに対して、周知のように、戦後のドイツ各地の記録保管所等に散在していた文書を綿密に調査したファリアス⁽⁷⁾とオットを初めとする歴史的研究が10数年前に発表されて以来、現在では当時の社会情勢、ハイデガーの学長時代の実際の言動、彼とナチズムとの実際の関係などがかなり正確に理解されるようになった。特に、オットがフライブルク在住という地の利を生かして、実際の記録と文書にもとづいた歴史的考証を広範囲にわたって行った仕事の意義はきわめて大きい。

このハイデガーの弁明を読むかぎり、そこに浮かび上がってくるのは、ハイデガーのナチ時

代の言動の確信に満ちたラディカリズムとその実践のうえでの挫折という対照的な暗い相面であり、またアクティヴなナチであったからこそこの過去を躍起になって抹消しようとするハイデガーの人格の、虚偽に満ちた、なりふり構わぬ、きわめて狡猾な相貌である。われわれは、ハイデガーがこの弁明のなかで一片の真実を述べながらも、これにいくつかの虚偽また虚偽の可能性の強い事柄をつなぎ合わせて再構成し、例えば、あたかも自分がナチから学問と大学を守るためにナチに形式的に入党したかのように見せかけ、学長就任後も純粹に学問の精神とこれにもとづく大学の改革という目標をひたすら求めたと偽り、さらに学長辞任後はあたかもナチによる被害者およびナチの批判者であったかのように装っているのであって、世界的な哲学者にしてはきわめて遺憾ながら、そのやり方はきわめて巧妙かつ狡猾であるとの印象を拭い去ることはできない。

やはりハイデガーは、ドイツ第三帝国の野望の崩壊という歴史の審判を受けながら、なおかつおのれの事実と思想を真に明らかにすることなく、自らの不都合な真実を隠蔽し、事実を歪曲し、さまざまな虚偽を用いて、自分をあたかもナチ抵抗者でもあるかのように見せかけて、フライブルク大学学長として学生と講師たちをナチ革命へと動員したこと、そして、たとえ間接的であるにせよ、ホロコーストという20世紀最大の非人間的な犯罪に自ら関与したことにたいする倫理的責任を決してとろうとすることもなかったばかりか、さらに偽りによって自らを粉飾してその虚像を後世に伝えようと企図したのである。ここに訳出した、ハイデガー自身の「弁明」にはかならない「事実と思想」は、このことを典型的に示す記録文書として、長く歴史に残ることであろう。

哲学者の「弁明」と言えば、われわれは何よりもまずプラトンが記録したあの『ソクラテスの弁明』を想起せざるをえない。しかし、ハイデガーのこの「弁明」とソクラテスの弁明とは、そこに表現された哲学的精神において、何と対極的な関係にあることであろうか。ハイデガーの「弁明」には、私が見るところでは、まったく不当な理由で法廷に召喚されて有罪を宣告され、弁明によって死罪を免れる機会がありながら、それにもかかわらず死を覚悟しておのれの思想と活動の真実を訴えてやむことがなく、いささかの道徳的落ち度もないことを自らの良心に確信しつつ、毒杯を飲み干して悠然として死に赴いたあの高貴なソクラテスの哲学的精神はみじんも感じられはしない。ハイデガーの「弁明」には、真実のみを追求してやまない熱情と意志も、ひたすらおのれ自身に沈潜しておのれの言動を内省する厳しい自己追求も決定的に欠如しており、したがって人間を感動させる要素が、少なくとも私にとっては、まったく存在しないのである。

訳出にあたっては、カーステン・ハリーズによる英語訳を参照した⁽⁸⁾。また、最新の歴史的研究の成果に照らして、とりわけハイデガーの叙述のうちに含まれている虚偽または虚偽の可能性が強い事柄を中心に、詳細な訳者注を付けておいた。なお、私は先に、このハイデガーの弁明に示されている主要な論点に即してその事実と真偽の関係を逐一検証するために、論文

「ハイデガーの弁明—『1933/34年の学長職。事実と思想』の真実—」⁽⁹⁾を書いた。この論文は、紙数の制約のために展開できなかった部分も多いので、さらにこれを補い、分量にしてこれのほぼ3倍に相当する規模で書き改めた論文「ハイデガー『事実と思想』の真実と虚構—ハイデガーの『弁明』再論—」を、次号の『人文学部学会紀要』第71号（2002年3月発行予定）に掲載する予定である。本訳とこれらの諸論文とを併せてお読みいただければ、まことに幸いである。

2001年10月31日

- 注（1）Vorrede von Hermann Heidegger, in Martin Heidegger, Die Selbstbehauptung der deutschen Universität. Das Rektorat 1933/1934. Tatsachen und Gedanken, Vittorio Klostermann, S. 6
- （2）Otto Pöggeler, Der Führer führen? Heidegger und kein Ende, Philosophische Rundschau 32, no. 1/2, S. 27
- （3）フライブルク市長宛のエルフリーデ夫人とハイデガーの手紙は、その一部がフーゴ・オットの著作に引用されている。Hugo Ott, Martin Heidegger-Unterwegs zu seiner Biographie, Campus Verlag, 1988, S.295ff（邦訳は、フーゴ・オット『マルティン・ハイデガー—伝記への途上で』、北川・藤澤・忽那訳、未来社、453～459頁）を参照のこと。
- （4）フライブルク大学学長室宛のハイデガーの手紙も、上記オットの著作にその一部が引用されている。Ott, ibid., S. 312（同上訳484頁）を参照されたい。
- （5）フォン・ディーツェ宛の手紙によるこのハイデガーの弁明は、その全文が、Herausg. von Bernd Martin "Martin Heidegger und das 'Dritte Reich'", Wissenschaftsgesellschaft Darmstadt, S. 201～212に収録されていて、読むことができる。
- （6）Gespräch mit Martin Heidegger, Der Spiegel, Mai 1976（邦訳は、「シュピーゲル対談」として、ハイデガー『形而上学入門』、川原栄峰訳、平凡社に収録されている）を参照のこと。
- （7）Farias, Heidegger et le nazisme, Lagrasse, 1987（邦訳は、ヴィクトル・ファリアス『ハイデガーとナチズム』、山本尤訳、名古屋大学出版会）を参照のこと。
- （8）Karsten Harries, The Rectorate 1933/34: Facts and Thought, Review of Metaphysics 38, March 1985を参照されたい。
- （9）奥谷浩一「ハイデガーの弁明—『1933/34年の学長職。事実と思想』の真実—」、札幌唯物論研究会『唯物論』、第46号、57～71頁（2001年10月）を参照されたい。なお、ハイデガーとナチズムとの関係を論究した私の論文としては、そのほかに「トム・ロックモアによるハイデガー・ナチズムの批判」、同上、第41号（1996年10月）、「シルヴィオ・ヴィエッタのハイデガー擁護論（1）」、同上、第44号（1999年10月）、「シルヴィオ・ヴィエッタのハイデガー擁護論（2）」、同上、第45号（2000年10月）がある。併せて参照していただければまことに幸いである。

マルティン・ハイデガー「1933/34年の学長職。事実と思想」

ヘルマン・ハイデガーの序文

マルティン・ハイデガーが行った学長就任演説「ドイツの大学の自己主張」は、語られるだけではなくて書かれることもまた多いわりには、読まれることが少ないものであった。その後50年が経過し、この演説のテキストを一般の読者に再び身近なものすることは、どうしても必要なことであるように思われる。古い誤植は6カ所あったが、これは今回訂正されており、マルティン・ハイデガーの手書きの原本にもとづいて、ふたつの些細な言語上の修正が挿入され

た。そのほかの点では、このテキストは1933年の初版に変更を加えることなく、復刻してある。

マルティン・ハイデガー——彼は、自分が任命した非—国民社会主義的な学部長を再び罷免することを拒否した⁽¹⁾のである——が1934年2月末に抗議して学長辞任をした⁽²⁾のはこの演説の第2版が公刊された直後であったが、この演説はそのあとすぐにNSDAP [国民社会主義ドイツ労働者党]⁽³⁾の指示により、書店から回収された⁽⁴⁾。

この演説の内容にかんしては、多くの誤りと虚偽が流布されてきた。1945年からごく最近まで、大学の教授でさえもその著作のなかでマルティン・ハイデガーの学長演説の文言だとされているものを引用しているのだが、そのような文言は演説のなかには見当たらない。「国民社会主義」とか「国民社会主義的」といった言葉はこの演説のなかには出てこないし、「[ドイツ語で単数形の] 指導者」や「帝国宰相」あるいは「ヒトラー」もまたその名をあげられてはいない⁽⁵⁾のである。

その当時は演説のタイトルが人々の注目を集めた。マルティン・ハイデガーは、後の多くのレジスタンス運動の闘士たちもそうであったように、最初は当時の国民的な勃興の気分にとらわれていたことは疑いない。彼は、その当時の運動に一時的に巻き込まれたことを決して否定しはしなかった。たしかに、彼は学長職の時期に誤りを犯しもした。彼は自らの不明を認めざるをえなかった。しかし、彼は無批判的な同調者ではなかったし、党の積極的なメンバーでもなかった⁽⁶⁾。彼は初めから党の指導部からはっきりと距離をとっていた⁽⁷⁾。このことは、例えば彼が大学での焚書⁽⁸⁾や「ユダヤ人プラカード」の掲示を禁止した⁽⁹⁾こと、非国民社会主義者だけを学部長に任命した⁽¹⁰⁾こと、そして彼が学長職を引き受けていた時期には、フォン・ヘヴェシー⁽¹¹⁾やタンハウザー⁽¹²⁾といったユダヤ人教授たちを大学に引き留めておくことができたことに表れていた。

マルティン・ハイデガーは、1945年の挫折の直後に回顧録「1933/34年の学長職。事実と思想」を書いた。彼は後に手書きの草稿を、しかるべき時期にこれを公表するようにと指示して、署名者に委ねた。学長演説は1982年にフランスで2ヵ国語で公刊された。この学長演説のどうしても必要な新しい版を復刻するには良いタイミングであるように思われる。この回顧録は1966年9月に行われた『シュピーゲル』誌インタビューと内容上は部分的に重なっているのだが、これが学長演説の復刻と同時に初めて公表されることになるからである。

校正のさいに協力してくれた私の妻ユッタ、ルイーゼ・ミヒャエルゼン博士、クロートヒルデ・ラップ夫人に感謝申し上げたい。

1983年1月アッテンタールにて

ヘルマン・ハイデガー

マルティン・ハイデガー「1933/34年の学長職。事実と思想」

1933年4月に、私は大学の総会で満場一致で学長に選出された⁽¹³⁾。私の職の前任者であるフォン・メレンドルフは、文部大臣の指示により、短期間仕事をした後辞任しなければならなかった⁽¹⁴⁾。フォン・メレンドルフと私とはしばしば後任について立ち入った相談をしていたのだが、彼自身は私が学長職を引き受けることを望んでいた⁽¹⁵⁾。同じように、かつての学長ザウアーは、私が大学の利害のために学長職を引き受けるようにと私を説得しようと試みた⁽¹⁶⁾。選挙当日の午前中になっても私はまだ躊躇しており、学長候補から身を引こうと思っていた。私は当該の政府機関または党機関とは何のつながりもなかった⁽¹⁷⁾。私自身が黨員ではなかったし、何らかのかたちで政治的に活動したこともなかった。だから私は、政治権力が集中するところで人々が、私にとってどうしても必要で課題であると思われたことについて、私のいうことを聞いてくれるかどうか、確信がなかった。だが、大学がどこまで自発的に、いっそう根本的な仕方大学固有の本質を発見し具体化することに手を貸してくれるのかも、同じように不確かであった。私は、すでに1929年の夏におこなった教授就任演説のなかで、こうした課題を公けにした。

教授就任演説『形而上学とは何か』の序文では、こう言われている。「われわれは、ここでそして今、われわれに問う。われわれの現存在は——研究者、教える者、勉学する者たちからなる共同体のなかでは——学によって規定されている。学がわれわれの情熱となっているかぎり、われわれには、どんな本質的なことが現存在の根底で起こっているのか。学の諸領域は互いに遠く隔たっている。諸学がその対象を取り扱う仕方は根本的に異なっている。学の諸分野のこうしたばらばらな多様性は、今日ではもろもろの大学や諸学部の技術的な有機組織化によってかろうじて統合されており、専門諸領域の実用的な目的設定によってやっとその意義を確保しているにすぎない。これに引き換え、諸学のその本質根拠にはりめぐらされた根は枯死してしまっている。」⁽¹⁸⁾この演説は、1933年にはすでにフランス語、イタリア語、スペイン語、日本語に翻訳されていた。

私がドイツ的大学についてどう考えていたか、そして私が何をドイツ的大学のもっとも切実な関心と見なしていたかは、誰もがいたところでこれを知ることができた。ドイツ的大学は、まさしく諸学の本質根拠であるその本質根拠から、すなわち真理そのものの本質から更新されるべきであった。そして、技術的な組織的・制度的な見せかけの統一に固執するかわりに、問う者たちと知る者たちとの根源的な生きた統一を回復すべきであった⁽¹⁹⁾。

私は1930年に真理の本質について講演を行った。この講演は一度ならず行われたもので、1932年までにはドイツの多くの場所で繰り返し開催され、その筆記録が複写されて知られるようになった。この講演は1943年になって初めて印刷された⁽²⁰⁾。この講演を行ったのと同じ頃、私はプラトンの洞窟の比喻を解釈する過程で、ギリシャ的な真理概念について2時間にわたる講

義を行った。この講義は、私が学長職にあったあいだの1933/34年の冬学期に繰り返され、「民族と学」にかんするゼミナールで補足された。このゼミナールには大勢の学生がつめかけた。洞窟の比喻の解釈は、1942年になって「プラトンの真理論」という表題で『精神的伝承のための年誌』に掲載された。この論文に言及したり論評することは党当局からは禁止された。同じように、別刷りを作成することと書店で別刷りを販売することが禁止された⁽²¹⁾。

学長職を引き受ける最後の日まで私が躊躇していたのは、私の企てで私が必然的に「新しいもの」と「古いもの」とに対して二重に反対することになるであろうからであった。「新しいもの」とは、そうこうするうちに「政治科学」⁽²²⁾というかたちで登場してきたものであった。この「政治科学」の理念は真理の本質をゆがめることにもとづいていた。「古いもの」とは、「専門領域」にとどまり、専門領域の前進を促し、この前進を教育のなかで使えるようにするという努力のことである。その努力は、本質基礎にたいするどの自覚をも抽象的・哲学的だとして退けるか、あるいはせいぜいのところ外的な装飾としてのみ認めるが、しかし、自覚としては完成せず、自覚の完成にもとづいて思考せず、大学にぞくもしないものである。

だから、私の試みが、お互いに対立していた「新しいもの」と「古いもの」との双方から同じようにして反対を受けて不可能にされてしまうという危険があった。最初の学期が進むにつれて、私が学長職を引き受けるさいには当然まだ知らず、予期することもできなかったことが、起こった。つまり、「新しいもの」と「古いもの」とが、私の努力を封じ込めて最終的には私を排除しようとして、とうとう手を組んだのである。

大学にたいして根源的な本質根拠付けを行うという私の企ては二重におびやかされていたが、それにもかかわらず、大学の多くの同僚たち、とりわけ解任された学長フォン・メレンドルフと以前の学長であり当時学長代理であったザウアーとの強い要請で、私はとうとう学長職を引き受ける決心をした⁽²³⁾。それは何よりも、K.ザウアーが主張したことだが、私が拒絶したならば大学の外部から誰かが学長として任命される可能性があることを考慮してのことであった⁽²⁴⁾。

だから、私が学長職を引き受けなければならなかった背景には三つの側面がある。

1. 私は、当時権力を掌握した運動のうちに、民族の内的な結集と再生にいたる可能性と民族の歴史的・西洋的な使命を見いだす道とがあると見ていた。私は、大学が自己自身を再生することで民族の内的結集に決定的に寄与する使命があると信じていた。
2. だから私は、学長職のうちには——党に所属していることと党の教義とを別にすれば⁽²⁵⁾——有能な人々をすべて自覚と再生という出来事に委ねて、こうした人々の影響を強めて確実にする可能性があると見ていた。
3. 私はこうした仕方で不適当な人物の進出と党組織や党教義の脅迫的な覇権とに対抗できると思った⁽²⁶⁾。

当時すでに、たちが悪く無能な多くの者、利己的で嫉妬深い多くの者が悪事を働いていたこ

とは事実である。しかし、そのことは私にとっては、われわれの民族の状況全体を見ればまさしくいっそう、有能な人々と本質的な目標とをかつぎだそうと試みるもうひとつの理由であった。傍観し、「手に負えない人々」を見下し、西洋の歴史的状況に目もくれずに従来のことを褒めたたえていけば、たしかにいっそう心地良かったであろう。私がすでに当時歴史的状況をどのように見ていたかは、次のように指摘することで示されよう。1930年にエルンスト・ユンガー⁽²⁷⁾の「総動員」にかんする論説が公刊された。この論説のなかには、1932年に公刊された『労働者』という著作の根本特徴が予告されていた。私は当時、私の助手をしていたブロック⁽²⁸⁾と一緒に、ある小さなサークルでこれらの著作を議論して、次のことを示そうと試みた。それは、これらの著作にはニーチェの形而上学のある根本的な理解が、この形而上学の地平から西洋世界の歴史と現在とが理解され、また予見される限りにおいて、語られているということである。われわれは、これらの著作をもとに、そしてこれらの著作の根底からいっそう本質的に思索しながら、来たるべきものを思索した。すなわち、われわれは同時に対決の姿勢をもって来たるものに立ち向かおうと試みたのである。その当時、多くの他の人々もこれらの著作を読んだ。しかし、彼らは、彼らが読んだ多くのほかの面白いことのために、これらの著作をかえりみず、そしてこれらがもつ射程距離において理解したりはしなかった。私は後に、1939年から40年の冬に、ユンガーの著作『労働者』の一部を、同僚たちのサークルで、もう一度詳細に議論した。私は、なぜ当時にあってもなおユンガーの思想が「事実」によって確証されるまでは人口に膾炙せず、そのうえ人々に敬遠されたのかがわかった。エルンスト・ユンガーが、労働者の支配と形態という思想のなかで考え、この思想に照らして見ているものは、惑星的規模で見られた歴史の内部での、力への意志の普遍的な支配である。今日すべてのものは、こうした歴史的現実のもとにある。それが、共産主義と呼ばれようが、ファシズムと呼ばれようが、あるいは世界民主主義と呼ばれようが、そうなのである⁽²⁹⁾。

私は当時すでに、力への意志というこの現実から、存在するものを見ていた⁽³⁰⁾。力への意志というこの現実、ニーチェの意味でも「神は死んだ」という命題によって言い表されていた。私は、本質的な根拠にもとづいて、この命題を学長就任演説のなかで詳論した。その命題はありきたりの無神論の主張とは無関係である。それはこういう意味である。超感覚的世界、とりわけキリスト教の神の世界は、歴史のなかではその影響力を失ってしまったのだ、と（ニーチェの言葉「神は死んだ」にかんする1943年の私の講演を参照されたい）。もしそうでなかったとすれば、第一次世界大戦は可能だったであろうか。そして、もしそうでなかったとすれば、まして第二次世界大戦は生じたであろうか⁽³¹⁾。

それゆえに、力への意志という形而上学の克服を根源的に自覚して考えるための、すなわち、西洋的な思考の始元に立ち返って西洋的な思考との対決を開始するための根拠と本質的な必要とが十分ではなかったのか。それゆえに、西洋の精神にたいするこうした自覚を行うために、われわれドイツ人のもとへ、知と知識を育成する場と見なされていたあの地——ドイツの大

学——を呼び覚まし、戦場へと導き入れようと試みるための根拠と本質的な必要とが十分ではなかったのか。

確かに「もし…ならば、そしてもし…でなければ、何が起こっていただろう」という言葉で始まる、歴史の進行に対する反論はいつも危ういものである。だがそれにもかかわらず、こういう問いは立てられてよい。もしも1933年頃に有能な人々がすべて、ゆっくりとひそかに団結して、権力を掌握した「運動」を純化して抑制するために立ち上がっていたとすれば、何が起き、何が阻止されていただろう、と。

確かに、人間が人間の責任を並べたてたり、これを他人に負わせたりすれば、そのことはいつも不遜なことである。しかし、罪人をさがして罪を査定するとしても、本質的な不履行という罪もまたあるのではないか。当時すでに予言の能力に恵まれていて、そのために到来するものをすべて到来したとおりに知っていた——私はそれほど賢くはなかった——人々が、なぜその彼らが、災いに立ち向かうために10年近くも待ったのか。なぜ1933年に、物事を知っていると思っていた人々が、なぜ当時まさしく彼らが、すべてを根本から善くするために立ち上がったというわけではなかったのか⁽³²⁾。

だが確かに——すべての有能な人々を結集することは困難だったであろうし、運動の全体とその権力地位にゆっくりとした影響を及ぼすこともまた困難だったであろう——その時、これから引き受けるようにとわれわれが委託を受けたもの以上に困難なものはなかったであろう。

私は学長職を引き受けることで、積極的なものを救い出し、純化し、強固にしようという試みをあえて行ったのである⁽³³⁾。

ただ党の教義を実現したり、「政治科学」の「理念」に合わせて行為することは、決して私の意図したことではなかった⁽³⁴⁾。しかし同じように、ただ従来行われてきたことだけを防御したり、たんなる仲介と調整によってすべてを水平化して、中庸に保ったりするつもりもなかった。その代わりに私は、大学が関わっているすべてを凌駕していたもろもろの本質的な事物が危機にさらされていることを、はっきりと確信していた。

だが、私には次のことも明かだった。それは、有能な人々の結集が事柄に即して根拠づけられており、ただたんに実的に根拠付けられているだけではなかったのだが、この結集を準備するために私が当時運動のなかに見ていた積極的な可能性が何よりもまず強調され、また肯定されなければならないであろうということである。この運動に対してただちに反対したり、ただ反対するだけであったとすれば、それは私の当時の確信（これは決して党にたいする信頼ではなかった）には合致しなかったであろうし、そうすることは賢いことでもなかったであろう。

私が学長職のあいだにとった根本的姿勢としては、以下のことをその特徴として確認してほしい。

1. 私は決して、何らかの党機関から何らかの政治的相談をもちかけられたことはなかつ

た。私は決してそのような協働を求めたこともなかった⁽³⁵⁾。

2. 私はそのほかにも党幹部と個人的な関係または政治的な関係をもち続けたことはなかった⁽³⁶⁾。

私の学長職の意図と姿勢は1933年5月の学長就任演説のなかで語られている

もちろんここではすべてが、どの語られた言葉の場合もそうであるように、どう解釈するかにかかっており、本質的なことに立ち入ってこれをまず見抜こうとする準備ができているかどうかにかかっている。学長演説の核心部分は、その分量から見ても分かるように、知と学の本質の解明であって、この本質のうえに大学が基礎づけられていなければならない、大学がその基礎のうえにドイツ的な大学そのものとしてそれ自身の本質において主張されなければならない⁽³⁷⁾。学の奉仕は、労働奉仕および国防奉仕と並んで第3番目にあげられているが、それは学の奉仕が後のふたつに従属するからというわけではなくて、本来的なものであり、至高のものだからであって、そこに大学の本質が集中しており、それゆえに自覚が集中しているのである。最初にあげた労働奉仕にかんしては、この「奉仕」という語が1933年のずっと以前に、時代の必要から、そして青年の意志から生じたものであり、この必要と意志によって刻印されていることを思い起こすことが必要である。しかし、私は「国防奉仕」という言葉を、軍隊的な意味で用いているのでも、攻撃的な意味で用いているのでもなくて、正当防衛というかたちの防衛として考えていた⁽³⁸⁾。

演説の核心部分は、知、学問、そして学問的に準備教育された職業の本質の解明のためにあてられている。内容からみれば、四つの主要なモメントが取りだされる。

1. 諸学を、その専門分野の本質領域の経験のなかで基礎づけること。
2. 存在者を、それが存在するとおりに存在させること [存在放下] としての、真理の本質。
3. ギリシア精神における西洋的知の始元を伝承し続けること（私の1932年夏学期の2時間連続の講義「西洋哲学の始元」を参照されたい）。
4. こうしたことにふさわしい西洋の責任。

これらすべてに含まれているのは、国民社会主義が真理と知識の本質にかんするニーチェの理解の粗野な改作として示した「政治科学」の理念を断じて認めないということである。これに加えて、私が「政治科学」の理念を拒絶していることは、演説のなかではっきりと語られている。

自覚と問いの姿勢は「闘争」におかれている。だが、演説では「闘争」とは何を意味するか。自覚のなかの本質的なものがギリシャ人の *ἐπιστήμη* [認識]、そしてつまるところ *ἀλήθεια* [真理] に溯るとすれば、その場合にはこう推論してよからう。「闘争」の本質もまた恣意的に考えられているわけではない、と。演説のなかで言われている「闘争」とは、ヘラクレイトスの断片53の意味で考えられている⁽³⁹⁾。しかし、しばしば言及されながら同じようにしばしば誤

解されているこの格言を理解するには、前もってふたつのことが注意されるべきである。私はこのことをしばしば私の講義と演習のなかですでに十分に述べておいた。

1. その断片は πόλεμος [ポレモス] という言葉で始まっているが、この言葉は「闘争」“Kampf”を意味するのではなくて、ヘラクレイトスが同義で用いた言葉 ἔρις [エリス]と同じことを意味する。だが、ἔρις [エリス]とは「争い」“Streit”を意味する——しかし、争いとは口論や口喧嘩やたんなる不和のことだとは考えられないし、まして敵対者に暴力を行使したり、敵対者をこらしめることだと考えられもしない——が、争いとは対決であり、そのために対決のなかでは、対決する者どうしの本質が相手にさらけ出され、そのようにしておのれ自身を示し、そしてその本質が出現する。そしてつまるところ、ギリシャ語でいえば、隠れなきもののおよび真なるものになる。闘争“Kampf”とは、本質をそなえたものにたいしてお互いにおのれを承認させつつおのれを危険にさらすことであるから、こうした問いと自覚とを「闘争」へと方向づけている学長演説のなかで再三にわたって語られているのは、「危険にさらされていること」“Ausgesetztheit”である。闘争と呼ばれたものがヘラクレイトスの格言に倣っていることは、格言そのものがまったくはっきりと証明している。ここで第2のことが注意されなくてはならない。
2. われわれは πόλεμος [ポレモス] を戦争“Krieg”と考えてはならないだけではなくて、ヘラクレイトスのものとされている「戦いは万物の父である」という命題に訴えて、戦争と戦闘とがすべての存在の最高原理であるとし、そうして戦争好きを哲学的に正当化したりしてもならない⁽⁴⁰⁾。

とりわけ、そして同時にわれわれはこう注意しなければならない。ヘラクレイトスの格言は——普通の仕方では引用されれば——すべてを歪めている。そのわけは、格言の全体がそうして隠蔽され、そうすることによって本質的なことが隠蔽されるからである。この格言はあますところなくこう述べている。

「対決とはたしかにすべてのものの種蒔きであるが、しかしすべてのうちで(そしてとりわけ)至高のもの——おのれを保持するもの——でもあり、しかも、それが一方の人々を神として示すが、他方の人々を人間として示すがゆえに、そうなのであり、一方の人々を奴隷として公の場に登場させるが、他方の人々を自由人としてそうさせるがゆえに、そうなのである。」⁽⁴¹⁾

πόλεμος [ポレモス] の本質は、δεικνύναι [デイクニュナイ] 示すことと ποιεῖν [ポイエイン] 製作することとにある⁽⁴²⁾。すなわち、ギリシャ語では、開かれたまなざしのうちへとつくりもたらすことにある。これが哲学的に考えられた「闘争」の本質であって、学長演説のなかで語られたことは、哲学的にのみ考えられていたのである。

対決しながら本質領域にたいして行うこの自覚は、どの学問においても遂行されなければならない。さもなければ、その自覚は知を欠いた「学問」ととどまることになる。大学そのものは、諸学の全体のそのような自覚から、おのれ自身をつうじて、大学の本質根拠にもとづいて、

もたらされる。その本質根拠とは、大学によって培われた知にとってのみ接近しうるものであり、そのために大学の本質はどこか別の場所から、つまり「政治」やそのほかの何らかの目的設定にもとづいて規定されることはできないのである。

学長演説は、こうした根本理解と根本姿勢にふさわしく、「ドイツ的大学の自己主張」というタイトルをもっている。ごくわずかな人々だけが、もっぱらこのタイトルがすでに1933年に意味していたことに、はっきりと気づいていた。それというのも、彼らは語られたことを、先入見なしに、そして空話によって曖昧にしたりすることなしに、明確に考えぬこうと取り組み、進んでその労を取った、ごくわずかな人々だったからである⁽⁴³⁾。

もちろん、別のやり方をすることも可能である。よく考えて見もせず、手っ取り早くこう見なすこともできる。国民社会主義による権力掌握の直後に新しく選ばれた学長が大学にかなる演説を行うのだから、その演説は国民社会主義「なるものを」「代表して」いる、つまり、大ざっぱに考えれば、「真理とは民族に役立つものだ」と述べている「政治科学」の理念を公表しているのだ、と。そこから、しかも正当に結論されるのは、ドイツ的大学の本質がその核心においてそうして否定され、この本質を破壊するようなことが行われたのだということである。だから、演説のタイトルはむしろこう言わなければならないだろう。「ドイツ的大学の自己斬首」、と。いやになるほど無分別で自覚する能力がないとすれば、安逸と逃避とを空話の中に持ち込み、悪意の程度を十分に高めるとすれば、そのように振る舞うことができるのである。

学長演説を解釈する場合、そのように無責任に振る舞うことができる。だがその場合には、ドイツ的大学の精神と救済にたいする責任を心得ているような人間であると詐称してはならない。というのは、そのように表面的に考え、そのように表面的にあてどなくおしゃべりすることは、おそらく政治的方法には一致するだろうが、思考の客観性という最内奥の精神に矛盾するからである。まさにこの精神を救わなければならないと詐称されているのである。

学長演説は、それにかかわりをもった人々によっては理解されなかった。内容的にも理解されなかったし、次のような観点から見ても理解されなかった。それはこの演説が、私の職務活動のあいだ、何が本質的であり、何がいつそう本質的でなくて外面的にすぎないかということを決断するための導きの糸を与えてくれたものを語っている、という観点である。

演説としたがって私の姿勢とは、党と権威筋によってはいつそう了解されなかった⁽⁴⁴⁾が、しかし反対派がただちにかぎつけた限りにおいては「理解されていた」。文部大臣ヴァッカー⁽⁴⁵⁾は、同じ日「コップフ」⁽⁴⁶⁾で行われた学長就任祝賀の宴会のあとで、彼が聞いた演説にかなる「見解」を私に述べた。

1. 演説は、党綱領の展望を回避する、一種の「私的な国民社会主義」である。
2. 全体がとりわけ人種思想にもとづいていない。
3. 彼が言うには、たとえ「政治科学」の理念がまだ十分に基礎づけられてはいないこと

を認めるにしても、「政治科学」の理念を退けていることは承認しがたい。

文部大臣のこの態度表明は、それがただちに党友たち、つまり当時の大管区学生指導者シェール⁽⁴⁷⁾、医学講師シュタイン博士⁽⁴⁸⁾、そしてフランクフルトにいるクリーク⁽⁴⁹⁾に伝えられたのだから、無関心でいられるものではなかった。ところで、これら3人は初めからカールスルーエにある文部省を支配しており、そもそも悪意がなく、善良な大学担当参事官のフェーアレ⁽⁵⁰⁾を配下に置いていた。

学長就任祝賀式典のすぐ後に、私が文部省に行ったとき、こう指示された。1. 今後は、そのような祝賀会に大主教が出席することは望ましくない、2. 学長就任祝賀会の後に行われた私のテーブルスピーチは、私が余計なことに神学部出身の同僚ザウアーをことさらに目立たせて、ザウアーのおかげで学問的にアカデミックな専門教育を受けることができたことを強調した点で、脱線であった、と⁽⁵¹⁾。

文部省内でそのようなことが話されたということは、ただたんに文部省の姿勢を全般的に特徴づけていただけでなくて、私があらゆる口論や不和を度外視して、とりわけ大学の内的再生のために努力していることに理解を示すことは、まったく望ましいことではなかったことを示していた。

私はその時すでに数週間学長職にあった。私の最初の職務行為は、学長就任2日目のことだが、どこであれ大学にぞくする場所に「ユダヤ人プラカード」を掲げることを禁止することだった⁽⁵²⁾。そのプラカードはドイツのすべての大学ですでに掲げられていたものである。私は学生指導者に、私が学長であるかぎり、こうしたプラカードは大学内には掲げさせない、と宣告した。その後、学生指導者は二人の同伴者とともに、こうした禁止処置を帝国学生指導部に報告するという言葉を残して、立ち去った。それからおよそ8日後に、SA [ナチ突撃隊] グループ指導者であるバウマン博士を通じて、SA 上級指導部内のSA 大学局からの電話による依頼があった。彼はユダヤ人プラカードを掲げることを要望していた。拒絶した場合には、私は私の罷免を、さもなければ大学の閉鎖を覚悟しなければならなかっただろう。私は拒否し続けた。文部大臣ヴァッカーはこう説明した。彼は、SA が当時ある役割を演じており、後にこれをSS [ナチ親衛隊] が引き継いだのだが、このSA に対してはなすすべがないのだ、と。

上にあげた出来事は、学長職を引き受けたその年が進行するにつれていっそうはっきりと現れてきた状態の最初の兆候にすぎなかった。まったく異なった政治的な勢力グループと利害共同体とがもろもろの主張と要求とを大学のなかへともち込んできた。文部省はしばしば副次的な役割を演じたし、そのうえベルリンに対して自立性を守ることに専心していた。いたるところで権力闘争だけが演じられ、その演者たちは、大学が制度として、学生団体または講師団体として勢力要因を示すくらい、大学に利害をもった。さらに、医者、裁判官、教師の職業グループが彼らの政治的諸要求を掲げて、彼らにとって不都合で疑わしい教授たちを罷免することを要求した。

混乱というすべてを支配しているこの雰囲気は、私にとって唯一残され、そのために私が学長職を引き受けた労苦に意を用い、あるいはまたこれを他人に知らしめるという可能性を与えはしなかった。すなわち、その労苦とは知の心構えと教育の本質とを自覚することである。夏学期は過ぎ行き、個人的な問い、そして制度の問いを検討することに費やされた。

唯一の、しかしもっぱら否定的な意味での成果は次の点にあった。それは私が、しばしばすぐにも目標と制限を超えて入り込んできかねない「肅清行為」のさいに、大学と同僚団体の不正と損害を防ぐことができたということである⁽⁵³⁾。

たんに防止するという仕事は、それを遂行したというかたちでは公にはならず、同僚団体がそれを何か見聞することは不必要なことでもあった。法学、医学、自然科学の諸学部 of 著名な功績ある同僚たちは、彼らに計画されていたことを聞けば、さぞかし驚いたことであろう⁽⁵⁴⁾。

私が職務を開始した最初の週に、文部大臣は学長が党に所属していることを重要視しているらしいということが分かった。ある日のこと、管区指導者代理であり、学長職にある私のところに現れた管区指導の第3番目のメンバーであるケルバー博士⁽⁵⁵⁾が、私に入党を薦めにやって来た。以前には決して政党には所属していなかった私は、ただ政治的な駆け引きには重きを置かない大学の利益だけを考えて、この招請を受け入れたが、しかし、これは次のようなはっきりと承認された条件をつけたうえでのことであつた。それは、私個人としては、まして学長としては、決して党の仕事を引き受けたり、何らかの党活動を行ったりはしないという条件であつた⁽⁵⁶⁾。私はこの条件を守ったが、そのことは困難ではなかった。私は、1934年初めの学長辞任（以下の叙述を参照のこと）以来、政治的には許容されないと見なされ、そして年を追うごとにだんだんと監視されたからである⁽⁵⁷⁾。

党への加入は、党指導部が大学問題・文化問題・教育問題にかんする助言忠告を私にさせようと考えないかぎり、たんに形式の問題であつた⁽⁵⁸⁾。私が学長職にあつた全期間にわたって、私は何らかの助言をしたり、党指導部やさまざまな党機関と会話したり、まして議決決定することにかかわったことは、決してなかった⁽⁵⁹⁾。大学は依然として嫌疑をかけられてはいたが、それと同時に文化プロパガンダという目的のために使おうとされてもいたのである。

私自身は毎日いっそう、私の本来の企図からして重要ではないと見なされなければならないことに携わらなければならなかった。私はそのような空しい職務を形式的に処理することに関心がなかっただけではなくて、同時にそれに不慣れでもあつた。というのは、私はそれ以前にはアカデミーのどの役職からも退けられており、それほど新米だったからである。これに加えて、秘書室の責任者もまた少し前に初めて職務についたばかりで、大学のことには同様に不慣れであつたという困った事態があつた。だから、不十分なこと、不適切なこと、不注意なことがたくさん起こつたが、同僚たちはもっぱらそのことに専念しているように見えた。学長演説は風に向かって語られ、学長就任祝賀会の日の後は忘れ去られた。学長職の全在任期間にわたって、演説にかんしては、同僚たちの側からは何の音沙汰もなかった。彼らは、学部政治のここ

数十年以来踏み固められた軌道のなかで動いていたのである。

すべてのこうした混乱とそのなかで生じた非本質的なことの優位とは、もしも1933年の夏学期が進むうちに大学にとってのふたつの危険がますます明らかに予示されてこなければ、我慢することができたであろう。

ハイデルベルク大学で学の本質にかんする講演をした⁽⁶⁰⁾機会に、私はそこでシュタイン博士とシェールをつうじてフライブルクのさまざまな教授職をすげかえる諸計画があることを聞き知った。大学が、信頼できる党員仲間で独占されて、そうしてとりわけ党員仲間がしかるべく学部長職を独占する可能性が生み出されるということであった。こういう見方が主張された。これらの地位を独占するにあたって今さしあたり重要なのは、学問的な意義とアカデミーの教師としての適性というよりはむしろ、政治的な信頼と活動者的な破壊力である、と。こうした表明と計画においても、クリークの影響力がフランクフルトからハイデルベルクおよびカールスルーエへと強まってきたということが、またしても示された。このことは私にとっては、カールスルーエでは、これまでの学部長をそのままにしておくことは我慢できない、ということの意味していた。もろもろの学部は国民社会主義の指導を必要としていた。それゆえに、大学のもともとの本質がこうした危機にさらされているのをあらかじめ防ぐには、しかるべき仕方で行動することが何よりも大切だったのである⁽⁶¹⁾。

第二の危険は外部からさし迫って来た。このこともまた、夏学期にエルフルトで開催された学長会議で認識された⁽⁶²⁾。その危険とは、学部の教授活動全体を、医者、裁判官、教師の職能階級とそれらの主張および要求とで定め、そのようにして大学を最終的には職業専門学校へと分割しようとやっきになることにあった。ただたんに大学の内的統一だけではなくて、アカデミーの教育の根本様式もまたそのことによって脅かされていた。すなわち、これらこそ私がある種の再生によって維持しようと試みたものであって、ただそのためにこそ私は学長職を引き受けたのである。

私は、制度改革を提起することで、ハイデルベルクと専門学校化の両方からさし迫っている危険に対処しようと試みた⁽⁶³⁾。その制度改革は、学部長をはりつけて、諸学部の本質と大学の統一とを維持することができるようにすることで、可能になるはずであった。制度改革の運動の根拠は、転覆を企てたり新しがり屋だったりするような活動欲ではまったくなくて、すでに述べたもろもろの危険の洞察である。これらの危険は、政治的諸力の配置と動かし方という観点では、決して思いつくことがなかったものである。

制度改革は、従来の事柄をたえずかなり一面的に見続けてきた大学の内部では、ただ制度的および法律的にのみ評価された。同じように、学部長の新しいはりつけも、個人的なひいきと冷遇という観点からのみ評価された。

私は1933/34年の冬学期に同僚たちを学部長に任命した。彼らは、私の個人的な判断からだけではなくて、学界とその専門分野における普遍的な判断からしても、世間に知られており、

それと同時に、それぞれが自分のやり方で自分の学部の仕事の中枢に学問の精神を持ち込むという保証を与えた。学部長は一人として党员ではなかった⁽⁶⁴⁾。党幹部の影響は遮断された。希望は、学問的精神を学部のなかに伝承し続け、これを生き生きとさせることにあった⁽⁶⁵⁾。

しかし、そうはならなかった。希望はすべて失われた。本来的なものにかんするどんな努力も空しかった。

1933/34年の冬学期にとって特有の前兆となったのは「トートナウベルク合宿」であった。この合宿は、講師たちと学生たちが本来の学期の仕事を準備し、学問と学問的労働の本質にかんする私の理解を明確にし、それと同時にこれを論究と討論に付するはずであった⁽⁶⁶⁾。

合宿参加者の選択は、党に所属しているかどうか、そして国民社会主義という意味での実際活動を行っているかどうかという視点から行われたのではなかった。合宿の計画がカールスルーエに知れわたると、その後すぐに、何人かの参加者を送る必要もあるという執拗な要求がハイデルベルクから寄せられた。同じようにして、ハイデルベルクがキール⁽⁶⁷⁾と了解をとり合った。

私は、大学と学にかんする講演で学長演説の核心部分を明らかにし、すでに述べた危険という観点から大学の課題をいっそうもっと鮮明に示そうと試みた。ただちに、個々のグループのなかで知と学問、知と信仰、信仰と世界観にかんする実り豊かな対話が行われた。2日目の朝になって、大管区学生指導者シェールとシュタイン博士が通告もなしに突然車でやって来て、ハイデルベルクの合宿参加者たちと熱心に話を交わした。ハイデルベルクの合宿参加者たちの任務が次第に明らかとなった。シュタイン博士は、彼自身が講演を行う必要があると依頼して来た。彼は人種と人種原理について話をした。その講演は、合宿参加者が確かに聞き置くところとはなったが、それ以上討議されはしなかった。ハイデルベルクのグループは、合宿をぶち壊すようにとの委託を受けていた。だが、本当に問題だったのは、合宿そのものではなくて、諸学部が党员によって指導されていないとされたフライブルク大学であった。その結果、不愉快な出来事が生じて、その一部は手痛いものでもあった⁽⁶⁸⁾。だが私は、すぐ間近に迫っている冬学期全体を前もって挫折させようとしたくなければ、この出来事を受け入れなければならなかった。おそらくは、その時すぐに職務を放棄するほうが正しかったであろう。しかし、私は当時はまだ、その日ただちに起こったことを計算に入れてはいなかった。それは敵対関係の激化であって、これは、文部大臣と彼に権能をもっているハイデルベルク・グループの側からもやって来たし、同僚たちの側からもやって来た。

文部大臣は、学部長の新しい割り振りを形のうえでは了解したのだが、それにもかかわらずただたんに党员が一人も地位を占めてはいないことだけではなく、それどころか、文部大臣が半年前に学長の職務には耐えられないとして拒絶した当の人物を、私があえて医学部長に任命したことをいぶかしく思っていた。そのうえ、文部大臣からは再三にわたってはっきりとこういう要望が寄せられていた。フライブルク大学では、政治科学の理念を貫徹することにかん

しては、これまで行われてきたのとはまったく違うやり方で、これをもっと真剣に受け止めてほしい、と。

ところで奇妙だったのは以下のことである。冬学期が進むうちに、医学部構成員からも法学部構成員からも、何度も私に、学部長の更迭を何よりも優先し、同僚のフォン・メレンドルフとヴォルフとを別の人物ですげ替えるようにという強い勧奨があった⁽⁶⁹⁾。私は、これらの願望が両学部内の不和とライバル意識の現れだに見なして、それ以上は意に介さなかった。1933/34年の学期の終り頃、冬も押しつまった時に、私がカールスルーエに呼び出されるまではそうだったのである。カールスルーエでは、参事官のフェーアレが大管区学生指導者のシェールをしたがえて、私にこう開陳した。文部大臣は、これらの学部長、つまりフォン・メレンドルフとヴォルフとを彼らのポストから解任することを望んでいらっしゃる、と。

私はすぐさま、いかなる場合にもそんなことはしないつもりであり、そのようなすげ替えには、個人的にも事柄からしても責任をもつことができない、と言明した。もしも文部大臣が自分の要望に固執していたとすれば、私には、こうした要求に抗議して私の職務をやめる以外には道は残されてはいなかったであろう。その時、フェーアレ氏は私にこう述べた。学部長を別の人物にすげ替えてほしいというのは、とりわけ同僚のヴォルフ氏にかんしては、法学部の願望でもあるのだ、と⁽⁷⁰⁾。

そのあとで私は、私が自分の職務をやめて、文部大臣と話し合う場を与えてくれるようにと、言明した。私が言明しているあいだ、大管区学生指導者シェールの顔にはせせら笑いが浮かんでいた⁽⁷¹⁾。こうした道をたどって望んでいたものが手に入った。だが、次のことが疑問の余地なく明らかになった。それは、国民社会主義のように見えていたものすべてに対して憤慨していた大学構成員は、私を学長職から追放するためには、文部省およびこれに影響力を及ぼしているグループとともに、陰謀を企てることを躊躇しようとはしなかった、ということである⁽⁷²⁾。

私が文部大臣と話し合ったとき、文部大臣は私の辞任をすぐに受け入れてくれたが、大学と学問にかんする国民社会主義者の理解と私のそれとのあいだには克服しがたい分裂があることが、明らかとなった。けれども、この対立は確かに私の哲学と国民社会主義的な世界観との両立不可能性にもとづいていたのだが、この対立がフライブルク大学と文部省との抗争として世間に伝えられるということは望んでいない、と文部大臣は述べた⁽⁷³⁾。私はこう答えた。私は、そのことにはもう関心をもちえない、それというのも、大学が文部省と一体となっているからであり、抗争という道を通して私個人について公的なうわさを立てることになっても、それは私にとっては重要なことではないからだ、と。文部大臣はこう答えた。私「ハイデガー」がこれ以上は目立つことのないかたちで学長職を辞任した後に、私が必要だと考えたとおりに行動するかどうかは、私の自由裁量に任されている、と。

引き続き学長職の引き渡しにさいしては、伝統的なやり方では離任する学長としてこれに参加して報告を行うのだが、私はこれを拒否することで行動した⁽⁷⁴⁾。大学のなかでもこうし

た拒否が理解されたし、自明のことだが、去り行く学長としてさらに進んだ助言を求めて私を呼ぶということもなかった。このことは、それ以前もそれ以後も普通のことであった。私はそのようなことを決して期待もしなかった。

1934年4月以来私は、私が「出来事」をもはや気にすることがなく、私の力の及ぶかぎりどうしても必要な教育上の義務だけをはたそうと試みた点で、大学の外部で生活していた。しかし、次の年には教授活動もまたこれまで以上に、本質的な思考とそれ自身との独話であった。それはおそらく、あちこちでなお人間と出会い、人間を目覚めさせたであろうが、しかし、一定の行動が生成する構成へと形作られたのではなかった。その行動自体からは再び根源的なものが生じたことであろうに。

1933/34年の学長職という、それだけとればさして重要ではない事例は、学の形而上学的な本質状態にとっての前兆であろう。その学とは、再生の試みによってはもはや規定されえず、また純粋な技術へとその本質を変えることで阻止されることもできない。私はその次の年になって初めてそのことを学び知った。『形而上学による近代的世界像の基礎づけ』⁽⁷⁵⁾を参照のこと。)学長職は、権力を掌握した「運動」のうちに、そのあらゆる不十分さや粗雑さを超えて、おそらくいつの日かドイツ人を西洋的に歴史的な本質のもとへと結集させようであろうはるかなる射程距離のあるものを認めようとする試みであった。当時私がそのような可能性を信じており、そのために思索という最も固有の仕事を断念し、職務上の活動を優先したということは、決して否定されてはならないのである⁽⁷⁶⁾。職務のうえでの私自身の不十分さが引き起こしたことについては、いかなる仕方でも情状が酌量されてはならない。しかし、こうしたパースペクティヴでは、私が職務を引き受けるようにさせた本質的なものは適切に表現されはしない。普通のアカデミーの営みという地平では、この学長職のさまざまな評価は、その仕方においては正しいかも知れないし、正当かも知れないが、それにもかかわらず決して本質的なことをとらえてはいないのである。今日もなお、幻惑されたまなざしにたいしてこの本質的な事柄の地平を開くという可能性は、当時よりもいっそう少ないのである。

本質的なことは、われわれがニヒリズムの完成の真っ只中にいるということであり、神は「死んで」いて、神性のためのどの時間・空間も塞がれているということである。それにもかかわらず、ニヒリズムの克服は、ドイツ人の詩的な思索と詩作のなかでは予告されていて、もちろんドイツ人はその詩作を聞き知ることがまだほとんどないに等しい。それというのも、ドイツ人は彼らを取り巻くニヒリズムという物差しにしたがって手筈を整えて、歴史的な自己主張の本質を見誤ることにひたすら努めているからである⁽⁷⁷⁾。

学長職の後の時期

私の学長職の誤りを自分の評価に照らしてあげつらうことを好んでいる人々にたいしては、そして彼らにたいしてだけは、次のことを言っておきたい。そんなことは、それ自体として見

れば、どうでもいいことなのであって、それは、惑星的な規模での力への意志の運動全体の内部では、決して些細なことと呼んではならないくらい、取るに足らない過去の試みと措置をむやみに詮索することと同じなのである⁽⁷⁸⁾。

私は、1934年の春に職務を辞したが、そのありうべき帰結についてははっきりと分かっていた。同じ年の6月30日⁽⁷⁹⁾以降、私にはそうした帰結が完全に明らかとなった。その時以降、なおも大学の管理職を引き受けた者は誰も、自分が誰と関係しているのかを疑いの余地なく知ることができた。

それから私の学長職が党と文部省、講師団と学生団によってどのように評価されたかは、私の後任者が職についたさいに新聞や雑誌で広められた確認のなかに記載されている。それによれば、この後任は、フライブルク大学の最初の国民社会主義的な学長であり、前線兵士として戦闘的・兵士的精神とこれを大学へと拡張するための保証とを与えた人物であった⁽⁸⁰⁾。

今や私に対しては嫌疑が抱かれ始め、この嫌疑は野卑な言葉を投げつけるまでに墮落していった。その証拠としては、当時創刊されたエルンスト・クリークの雑誌『生成する民族』の数年分を参照するだけで十分である。この雑誌の一冊が刊行されたが、それはほとんど全部の誌面を使って、隠然とあるいは遠回しに思いもよらぬ論難を行って、私の哲学をこきおろした。私は、今までこうした行動にまったく注意を払ったことはないし、これにかかわりあって反駁しようという気にはまったくならなかった。だから、私はそれがお粗末であるせいもあってことさらこれに反撃をするということはまったくしなかったのだが、そのことが怒りを高めることになった。アルフレート・ボイムラー⁽⁸¹⁾も、ローゼンベルク局⁽⁸²⁾の委託を受けて、これとはいくらか異なった仕方で、これと同じように私に嫌疑をかけるように働きかけた。ヒトラー・ユーゲントの雑誌『意志と力』がこれに加勢した。その間に印刷された私の学長演説は、講師たちの合宿では論争の恰好の標的対象となった。(これは、ハンス・ゲオルク・ガダマー⁽⁸³⁾、ゲルハルト・クリューガー⁽⁸⁴⁾、ヴァルター・ブレッカー⁽⁸⁵⁾によって証言されている。)

私が1934年の後に純粋に学問的な範囲のなかでごくまれに行った講演ですらも、当地の党新聞がそのつど不愉快な仕方でこれを揶揄したし、当時の大学指導部はそのつど、こうした行動に対して干渉しようとして重い腰をあげることができた。行われた講演は、1935年の「芸術作品の起源」、1938年の「形而上学による近代世界像の基礎づけ」、1941年の「ヘルダーリンの賛歌『回想』」、1943年の「ヘルダーリン追悼記念」であった。

私の講義にも広がって来たこうした包囲攻撃は、意図したことを次第に成功へと導いた。1937年の夏学期には、ベルリンからやって来たハンケ博士⁽⁸⁶⁾がゼミナールに現れた。彼は、才能ある探究心の強い人物で、私のところで共同作業をした。まもなく彼は私にこう告白した。彼は、当時南ドイツ SD [保安課報部] の主要メンバーを指導していたシェール博士の委託を受けて仕事をしていることを、私にもはや隠しておけなくなった、と。シェール博士は、彼に次のことを注意したそうである。それは、私の学長演説がフライブルク大学の非一国民社会主義

的な外見となまぬるい姿勢の本来の基礎をなしているということであった。私はこれを自分の功績としようとは思わない。ただ、1934年に始まった敵対関係は戦い抜かれ、強化されたというものを概略として述べておくにとどめたい。

同じハンケ博士は私に、SDでは私がイエズス会士と共同作業をしているという理解が流布しているとも述べた。実際に、私の講義とゼミナールには最後まで、カトリックの団体（特に、イエズス会士とフライブルク居住地出身のフランチェスコ会修道士）に所属している者がいた。こうした諸君には、そのほかの勉学者たちとまったく同様に、私のゼミナールを通じて共同作業と勉学の援助を行う可能性があった。数学期間をとおして、イエズス会の神父であるロッツ、ラーナー、フイドプロの各教授が私の上級ゼミナールのメンバーであった。彼らはしばしば私の家に来た。私の思索が彼らに影響を与えたことは否定しようもないが、このことをただちに知るには、彼らの書いたものを読んで見さえすればよい⁽⁸⁷⁾。

事実また後になって私のところでは、もっぱら私のゼミナールのカトリックのメンバー——シューマッハー神父、グッゲンベルガー博士、ボーリンガー博士⁽⁸⁸⁾——にゲシュタポの捜索の手がのびて来た（ミュンヘンの学生活動家ショルとの関連でそうであった。彼の活動の発生源がフライブルクと私の講義とにあるとして捜索されたのである⁽⁸⁹⁾）。

それより前にすでに、学長職を辞任した後のことだが、私が以前の弟子たち（非アーリア系人物）に自分のゼミナールへの出席を許可したことに異議が唱えられた。

さらに次のことがよく知られている。それは、哲学の若い世代の平均をはるかに凌駕していた私の3人の優れた弟子たちが、数年たつうちに、彼らがハイデガー学徒であるという理由で、冷遇されたということである（ガダマー、G.クリューガー、ブレッカー）。彼らは、最終的にもはや彼らの能力の認定を避けて通ることができなくなり、そのスキャンダルが知れ渡るようになった時に、初めて教授職にありついた⁽⁹⁰⁾。

1938年以来、新聞と雑誌では私の名前をあげることが禁じられた⁽⁹¹⁾。同じように、私の諸著作を論評することも、これらの著作がまだ新しい版を重ねることができたかぎり、禁じられた。最後に、出版社が必要な紙を用意していたにもかかわらず、『存在と時間』とカント書の新しい版の刊行もまた拒否された⁽⁹²⁾。自分の国のこうした死せる沈黙にもかかわらず、外国では私の名前で文化プロパガンダを行い、私を講演に呼び出そうという試みがなされた。私は、スペイン、ポルトガル、イタリア、ハンガリー、ルーマニアへのそのような講演旅行をすべて断った⁽⁹³⁾。事実また、私はフランスに駐留する国防軍にたいする学部構成員の講演にも決して参加しなかった。

次の事実が、私の哲学的な仕事を評価し、排除しようと試みるやり方を物語っているかもしれない。

1. 1935年にプラハで国際哲学会議があった時、私はドイツ代表团にもぞくさず、参加の招待を受けたことさえも決してなかった。

2. 同じようにして私は、1937年にパリでデカルト国際会議が行われた時も、排除され続けられなければならなかった。私に対するこうした措置はパリでは奇妙だと思われたので、パリの国際会議委員会がソルボンヌのブレイエ教授をつうじて、なぜ私がドイツ代表団に加わっていないのかと私にたずねて来たくらいであった。その国際会議自体が講演を行うようにと私を招待しようというのである。私は、このことにかんしてはベルリンの帝国教育省に問い合わせてほしいと返答した。ほどなくしてベルリンから私に要請があって、補充要員としてなお代表団に加わるようにとのことであった。万事が、私がドイツ代表団とともにパリへ行くことを不可能にするような仕方で行われたのである⁽⁹⁴⁾。

戦争のあいだに、ドイツ的精神科学の叙述の公刊が準備された。「体系的哲学」の部門はニコライ・ハルトマンの管轄下にあった。この企画を練り上げる目的で、3日間の論評会がベルリンで行われた。これには、あらゆる哲学教授が招待されていたが、ヤスパースと私は例外であった。われわれは必要とされはしなかったのだが、そのわけは、こうした出版と関連して「実存哲学」に対する攻撃が計画されており、そのとき実行に移されてもいたからである⁽⁹⁵⁾。

学長職の時代にすでにそうであったのだが、この場合にもまた敵対者どうしの奇妙な傾向が示された。それは、お互いに敵対関係にあるにもかかわらず、すべてのことに対して同盟を結ぶという傾向である。そのことによって精神的に脅かされ疑いがかけられているとを感じるものなのである。

しかし、これらの出来事もまた、ただたんにわれわれの歴史の運動の波間に浮かぶ一時的な仮象にすぎない。ドイツ人たちは、破局が自分たちに襲いかかっている今になっても、この歴史の運動の次元にはまだ気付いていないのである⁽⁹⁶⁾。

訳者注

- (1) ヘルマン・ハイデガーのこの叙述は、事実関係を何ら確かめようとせず、マルティン・ハイデガーの「事実と思想」と『シュピーゲル』対談をおうむ返しにそのまま繰り返しているにすぎないという点で、きわめて問題である。本訳注(10)と(64)で述べるように、とりわけファリアスとオットの調査によれば、父マルティンが「非国民社会主義的な学部長」を任命したというのも、また「非国民社会主義的な学部長を再び罷免することを拒否した」というのもともに虚偽であることは、記録文書によって確認されている。
- (2) ハイデガーの学長辞任の真相はいまだにはっきりと解明されているとはいえないが、バーデン州文部省の記録と書簡を見るかぎり、ハイデガーは学部長の罷免に抗議して辞任をしたということは確認されない。オットによれば、ハイデガーの学長辞任の理由として推測されるのは、彼が1933年12月には「ナチズムの国家の諸力と要求とにもとづく」大学教育改革が大学内部の摩擦を引き起こしてどうにもならない事態に立ち至っていたこと、そしてハイデガーが期待をかけていた「ドイツ大学帝国連合」の指導者となるという野望が同年11月に完全に潰えたことなどである(Hugo Ott, Martin Heidegger-Unterwegs zu seiner Biographie, S. 230. オット『マルティン・ハイデガー—伝記への途上で』353~355頁)。詳細は、本訳注(72)を参照されたい。
- (3) NSDAPというのは、正式名称Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterparteiの略称であり、国民社会主義ドイツ労働者党のことである。ナチまたはナチ党というのは、周知のように、この政党の俗称にはかならない。以下の本文に出てくる国民社会主義とは、このナチズムを指している。
- (4) この叙述も、ハイデガーが『シュピーゲル』対談で述べた「私の学長就任演説は1934年以後まもなく

ナチス党の指示により、書店から回収されました」(Der Spiegel, Nr. 23, 1976, S. 205. ハイデガー『形而上学入門』平凡社, 380頁)という発言をそのまま繰り返しているにすぎない。ファリアスの調査によれば、ハイデガーのこの発言はまったくの虚偽であって、彼の学長演説はナチ党の公式の書籍目録のなかで推奨されていたほか、その第3版が1937年には4千~6千部も印刷されており、ハイデガー自身が同年4月27日にこの第3版とヘルダーリン論の別刷りを添え書きとともにマリア・リーツマン夫人に贈呈していることが知られている(Farias, Heidegger et le Nazism, p.249. ファリアス『ハイデガーとナチズム』, 山本尤記, 名古屋大学出版会, 270頁)。また、ハイデガー自身が1945年11月にフライブルク大学学長室あてに提出した書簡には、「学長演説は1934年にもまだ絶版にはなっていませんでした」とある(Ott, S. 230. オット355頁)ことを忘れてはならない。

- (5) これはレトリック上のすりかえにほかならず、事情とドイツ語とを知らない人を惑わせるものである。確かにハイデガーの学長演説では、名詞形だけに限って言えば、ドイツ語で単数の「総統」を表す der Führer は用いられていないが、しかし、「総統たち」という言葉は複数形で die Führer, jene Führer, in seinen Führern というかたちで何度も用いられているし、「総統たること」または指導者性を意味する Führerschaft も1度用いられている。当時の歴史的文脈で見れば、これらが総統ヒトラーと指導者原理そのものと内的に深く関連することは疑う余地がない。ハイデガーが学長演説でなぜ単数形ではなくて、複数形の「総統」を用いたかにかんする問題は、決して単純なたんなる言葉上の問題ではありえない。例えば、ベッゲラーは論文「指導者たちを指導する?」のなかで、この時期のハイデガーは政治的「指導者たち」を哲学者である自らが指導するということすら意図していたという可能性があると指摘する(Vgl. Pöggeler, Den Führer führen? Heidegger und kein Ende, Philosophische Rundschau 32, no. 1/2)。「帝国宰相」と「ヒトラー」もまた、学長演説では直接には名指しされていない。しかし、「民族共同体への献身」などの民族ナショナリズムだけでなく、「大地と血」のスローガンが叫ばれ、国際機関が誹謗され、アカデミーの自由の放逐が主張され、「闘争」「進軍」「統率と服従」などの突撃隊の用語で飾り立てられたこの演説のナチ的性格は否認されえない。また、ハイデガーの学長職の前・中・後のいずれの時期をとっても、彼のナチ的言辞と行動にかんするきわめて多数の記録が残されており、とりわけフライブルク学長時代のハイデガーがアクティヴ・ナチであったことは、疑う余地がない。
- (6) 何をもって、またいかなる基準によって「積極的なメンバー」とするのかは不明であるが、ハイデガーが少なくとも学長職を引き受ける少し前から、その思想と行動の両面から見て、ナチの運動に対して確信をもった「同調者」であり、「積極的メンバー」であったことは間違いない。例えば、ナチ革命の当初の段階で、ハイデガーがナチのイデオロギーであるエルンスト・クリーク、アルフレート・ボイムラーらと協力関係をもっていたことは明らかであるし、ハイデガー自身が法学者カール・シュミットらに手紙を送って共同研究を呼びかけたことがある。またハイデガーは、学長辞任後もベルリンのプロイセン文部省の大臣ルストの知己を得て、これと協力して、ナチの「ドイツ帝国教官アカデミー」、「ドイツ法律アカデミー」、「ドイツ政治大学」などの設立と運営に関係していた。
- (7) ハイデガーは、1936年になってとりわけナチのイデオロギー部門をとりしきっていたローゼンベルク当局、またはナチの教育学者エルンスト・クリークらと対立し、彼らによって監視されたり、攻撃されたりするようになるが、「党の指導部からはっきりと距離をとっていた」明確な証拠は存在しない。メルヒェンとエリク・ヴェーユの証言によれば、1931年にはハイデガー家の全員がナチに「改宗」していたことが人々を驚かせたという。ヤスパースの報告によっても、1933年の学長就任後になおハイデガーがヒトラーを崇拝していたことが明らかである。
- (8) オットによれば、確かに1933年5月10日にはフライブルク大学図書館前広場で焚書が行われたという。しかし、ハイデガーはこの野蛮な行動を阻止せず、また阻止することもできなかった。その時居合わせた証言者によれば、それは雨模様の中で行われた(Ott, S. 182. オット278頁)。
- (9) オットは、ここで言うユダヤ人プラカード Judenplakaten とは、ドイツ学生連盟の指導のもとで1933年4月12日に配られたビラのことであろうと推測している。それは「非ドイツ精神に抗す」という表題をもち、12のテーゼが書かれた、47.5×70cmの縦サイズの白い紙であった(Ott, S. 181. オット277頁)。ハイデガーは就任2日にしてこのビラを禁止したというが、当然ながら、学長名による命令文書が存在しないかぎり、これが事実だということは証明され得ない。たとえそれが事実であったにしても、その理由がその反ユダヤ的内容にあったとは考えにくいであろう。オットが言うように、それは美的な理由からであったかも知れないし、その必要がすでになくなったからであったかも知れない。
- (10) この箇所は「事実と思想」のハイデガーの叙述の受け売りにはほかならないが、重大な虚偽である。後にやや詳しく述べるように、ハイデガーは1933年10月1日、大学に適用された「指導者原理」にもとづ

- き、「指導者＝学長」として自らの権限にもとづいて事務局長、学部長、評議員を任命した。もちろんそのなかには、自分を学長にかつぎ出した功労者でナチ信奉者シャーデヴァルト、そして自分の腹心であるヴォルフのような「国民社会主義的」人物が含まれていた。ファリアスによれば、「ハイデガー自身によって選抜された役職者たちは、ザウアー、メレンドルフ、地質学者ゼルゲルを除いて、すべてナチの党员かその信奉者であった。」(Farias, p. 98～99. ファリアス120頁)。
- (11) この叙述もハイデガーの『シュピーゲル』対談での発言にもとづいている。ハイデガーが古典文献学のエドゥアルト・フレンケルとフォン・ヘヴェシーの二人のユダヤ系教授の講義資格剥奪に反対したことは事実であり、彼の1933年7月12日の文部省宛書簡で明らかである。ユダヤ系の物理化学教授ゲオルク・フォン・ヘヴェシーは、ハンガリーの政治エリート一族の出で、当時国際的に名高い化学者であり、いくつもの賞の受賞者である。後にデンマークに移住して、1943年にノーベル賞を受けた。応用化学と化学者養成にかんして抜きん出た人物で、ロックフェラー財団から莫大な資金をドイツに提供してもいた。ハイデガーでさえも、このユダヤ系人物を失うことはさまざまな意味で不利に働くと考えたというのが、その真相であろう (Ott, S. 199. オット307～8頁)。
- (12) ハイデガーは、雑誌『シュピーゲル』インタビューでフォン・ヘヴェシーと並べてジークフリート・タンハウザーについて触れ、彼の名前をフライブルク大学付属病院長として引き合いに出している。医学部教授タンハウザーは1934年に強制退職させられ、アメリカに亡命した。1945年12月の政治的浄化委員会報告書によれば、ハイデガーが自らの反ユダヤ主義の嫌疑を打ち消そうとして自分が学長時代にこれら二人のユダヤ人教授を任命したことを持ち出したが、これに対してはフライブルク学長と前学長から異議が唱えられている。Hrsg. von Bernd Martin, Martin Heidegger und das 'Dritte Reich', S. 196～197を参照されたい。
- (13) 正確に言えば、この学長と評議員の再選出のための大学総会には、93名の選挙権者のうち、投票権をもちながら人種を理由として排除されたメンバーが13名いた。大学総会は、同月7日に公布されたばかりの「公務員制度再建法」というユダヤ人追放を意図する新しい法的規制のもとで、いわば前代未聞の異常事態のなかで行われた。
- (14) これは虚偽である。オットによれば、ヴィルヘルム・フォン・メレンドルフは確かにハイデガーの前任者であり、1932年12月にフライブルク大学学長内定者となったあと、翌年4月15日に学長に就任したにもかかわらず、一週間ほどその職にあっただけで自らその職を辞した (Ott, S. 139. オット206頁)。だが、彼は自らの意志により、職を辞したのであって、ナチ当局または文部大臣の指示により辞職させられたのではない。社会民主党員で共和主義者でもあった彼は、元学長であり、教父神学の教授であり、キリスト教考古学を講じていたカノン・ヨーゼフ・ザウアーの信頼が厚く、ザウアーの日記によれば、彼から学長の最適任者であるとの評価を受けていた (Ott, S. 140. オット209頁)。フォン・メレンドルフは、ナチの半公式的な新聞『アレマン人』から「かかる姿勢の人物が学長執務を執り行うなどというのは、本党の見解では、国家革命と和合しうることではない」などとして攻撃を受けていたし、カトリック中央党にぞくしており後に罷免されたフライブルク市長ハンス・ベンダーとも親しく、このこととの関連でも危険な立場にあった (Farias, p. 97. ファリアス118頁)。ハイデガーが彼を学部長に任命したのは、彼が学長経験者であったことのほかに彼の人望と自治管理能力の高さを無視しえなかったからであろう。しかし、原資料から見ると、文部省当局からは彼にたいする反対や罷免要求はまったく存在しなかった。
- (15) これはハイデガーによって意図的につくられた虚偽である。ナチ系の新聞から「がちがちの民主主義者」として攻撃されていたフォン・メレンドルフが、まだ入党してはいなかったがすでに公然としたナチ信奉者として活動し始めていたハイデガーを、心から賛同して学長に押したということはきわめて考えにくいことである。次の注をも参照されたい。
- (16) これもハイデガーの虚偽であり、彼が故意に行ったナチ加担隠蔽工作の一環である。オットが閲覧したヨーゼフ・ザウアーの1933年4月14日の日記によれば、当時のことがこう書かれている。「それからシャーデヴァルトがやってきて一時半までいた。彼は本学における『統制』を問題にし、ハイデガーを学長にすべきではないかと言った。わたしはそれに対して、ハイデガーは本来の管理的な事柄や運営上の事柄については、特にいまは以前より厳しい状態であるために、ほとんど問題になりえないと反対した。…いずれにせよまだメレンドルフがいるし、彼が一番適任であると強く言いもした。」(Ott, S. 140. オット209頁) ザウアーは、ナチ国家に献身していたギリシャ古典文献学者シャーデヴァルトがハイデガーを学長にかつぎ出そうとして学内工作を行っていたことを内心不愉快に思っていたのである。ハイデガーの偽装工作の典型がここに見られる。社会民主党員のフォン・メレンドルフとカトリック神学者

のザウアーが学長職を引き受けるように説得したというように筋書きを描けば、二重の意味で自分のナチとしての過去を隠蔽することが可能になるからである。

- (17) これも虚偽である。ファリアスによれば、ハイデガーは、ナチスが権力を掌握した直後の1933年2月にはすでに、エルンスト・クリークから手紙を受け取り、彼が設立を計画していた「ドイツ大学教師文化政治研究集団」に全面的に賛同し、呼びかけ人のなかにボイムラーとハンス・ハイゼの名前がないことを残念がっている。そして、3月にはフライブルク大学の代議員としてこれに参加し、まだ入党はしていなかったが、ナチの活動家としてその姿をはっきりと現している。オットによれば、4月上旬には、カールスルーエの内務省からナチ大学担当官のオイゲン・フェーアレがやって来て、フライブルク大学を視察し、多くのナチ系教授とも会合をもち、党政治の活動調整を行った。こうした状況のなかで、ハイデガーはすでに次期学長をめぐるプロイセン文部省との交渉に入っており、ナチによるこうした根回しと多くのナチ党員およびその信奉者に取り囲まれて、ハイデガー学長が誕生した。ハイデガーとフェーアレとは少なくとも学長選挙ではたがいに手を組んでいたのである (Ott, S. 140. オット209頁)。シャーデヴァルトがハイデガー学長誕生に際して果たした重要な役割については、ファリアスにも詳しい (Farias, p. 98. ファリアス119頁)。
- (18) この文については、Heidegger, Was ist Metaphysik, Neunte Auflage, S. 24~25 (邦訳『形而上学とは何か』理想社, 35~36頁) を参照のこと。ただし、訳文は邦訳に従ってはいない。なお、この部分は、ハイデガーが1929年に教授就任講演として述べた講演の部分にあって、ハイデガーが言うように、1943年にその第4版を出した時にその序論として新たに付加された部分にあるのではない。
- (19) こうした諸学の現状と学問観を当時ハイデガーがいただいていたことは確かであるが、しかし、大学と学問の固有の本質から大学が革新されなければならないということだけがハイデガーの学長就任に直結しているわけではない。ハイデガーは、自ら引用した『形而上学とは何か』の一節のあとは、この大学と学問の真理根拠からの革新を具体的にどう展開するかという建設的な議論を継続せずに、論点を「無」にかんする形而上学へと移動させ、かくしてわれわれを曖昧模糊たる形而上学的な抽象議論へと引き込んで、当初の問題を霧散無消させている。そして、ハイデガーの学長演説の根幹部分は、真理探究とそのための大学の変革ではなくて、ドイツ民族の自己実現と防衛奉仕にじかに役立つための大学変革であった。ここに見え隠れするのは、学長職受託の政治的意味を純学問的な変革へとすり替えて、自己の免罪を図ろうとするきわめて欺瞞的な態度である。
- (20) この講演は『真理の本質について』として1943年に公開された。
- (21) 論文への言及と論評の禁止というのは、ハイデガーによる論点の意図的な拡張にほかならない。これにはさまざまないきさつがあった。ハイデガーは1936年になって初めてローゼンベルク当局から警戒のまなざしで見られるようになった。1942年にハイデガーは、イタリアの哲学者エルネスト・グラッシ編集の『精神的伝承のための年誌』第2巻に自らの論文「プラトンの真理論」を掲載しようとしたが、そのさいローゼンベルク当局の学術本部学術監視査定局がこれに干渉した。オットが文書で確認したところによれば、当局は「もしグラッシ教授が、ハイデガー論文の掲載を断念するのなら、それは結構なことだと思われる」と所見を通達した。しかし、問題とされたのは、ハイデガーがナチズムを批判したというのではなくて、彼のヒューマニズム概念がブラッハマンの「政治的ヒューマニズム」と相いれなかったということにすぎない。ハイデガーはこの措置にどう対応したか。彼は、こともあろうに、帝国宣伝省を介して、ムッソリーニとイタリア大使に働きかけて、削除を受けずに自分の論文を公表するという目的を達したのである。その引き換え条件はこの寄稿について論評は行わないというものであった。Ott, Martin Heidegger und Nationalsozialismus, Herausg. Gehthmann-Siefert und Pöggeler, Heidegger und die praktische Philosophie, Suhrkamp, S.72~73 (邦訳『ハイデガーと実践哲学』法政大学出版局, 73~75頁) を参照のこと。したがって、この件をナチによるハイデガーの言論禁止措置と理解するのは早計だということになる。
- (22) 「政治科学」Politische Wissenschaftとは、ハリーズによれば、フィリップ・レーナルトやヨハンネス・シュタルクのように、相対性理論や量子力学を非ドイツ的として攻撃し、ドイツの数学・ドイツの物理学などの政治化された科学を創造しようとした試みである。Harries, ibid., p.483, note6を参照のこと。
- (23) 上記注(14)(15)(16)で述べたように、これは虚偽である。
- (24) これも虚偽の疑いが強い叙述である。これを証明する記録文書は存在しない。注(17)で述べたように、ハイデガー学長誕生直前のナチ系教授とその同調者によるさまざまな政治的駆け引きや根回し、ハイデガーが任命した学部長・評議員などの顔触れを見るかぎり、「大学の外部から [ナチの一訳者] 誰かが

- 学長として任命される」可能性はきわめて少なかったと考えるのが自然であろう。これは事情を知らない者にたいする二者択一を迫る威嚇的な言辞にはかならない。
- (25) ハイデガーは、ここで「党员であることと党の教義を度外視して」歴史的好機の自覚と大学の内的再生のためにあえて学長職を引き受けたと言うのだが、この叙述もまた、学長就任後の彼のとった言動と学内処置、それにベルリンとの政治的駆け引きその他を見るかぎり、限りなく虚偽に近いといわなければならない。例えば、ハイデガーは学長就任後、カールスルーエの文部省に協力してナチのいわゆる「指導者原理」に適合するかたちで大学基本法の改正に取り組み、この改正とともに「指導者—学長」として自らの手に権限を集中したことを見ても分かるように、大学内に「指導者原理」を持ち込むために活動したことは明らかであり、その限り彼は「党员であることと党の教義」のうえに立ってきわめて忠実に仕事をしたのである。そして、やがてそのことが彼の辞任につながることになる。
- (26) この叙述は、ハイデガーがあたかもナチ抵抗者であったかのような描き方であるが、もちろんこれもそのまま受け取るわけにはいかない。ハイデガーは当時このようなナチスに対する防御的な姿勢を取っていたのでは決してなく、その反対に、ナチの立場に立って指導者原理を大学内に貫徹するために活動していたのだからである。
- (27) ユンガーはハイデルベルク生まれのドイツの文筆家で、第一次世界大戦に志願兵として塹壕戦に参加した体験から、近代戦争を全面戦争、すなわち戦争への科学技術と国民の全面的動員と特徴づけたうえで、意志・暴力、そして戦闘と破壊のなかで発揮される男性的精神を賛美して、これをブルジョア的退廃に対置した。彼にとっては、こうした総力戦と総動員の強力な担い手は組織されたドイツ労働者にほかならず、こうした観点からドイツ労働者の武装を呼びかけた。こうしたユンガーの思想は、初期のナチズムの興隆とナチ革命に大いに貢献したと言われるが、ナチスには入党せず、次第に反ナチと目される言辞を行うようになり、後には要注意人物とされた。ハイデガーはこのユンガーと親交を結び、戦後になってもお生誕記念などの催しに出席したり、彼のために論文や手紙などを書いている。
- (28) ユダヤ系のヴェルナー・ブロックは、ゲッティンゲン大学で「ニーチェの文化の理念」で教授資格を取得したが、1931年にハイデガーによって注目され、彼の提案でフライブルクで教授資格を取得し直したのち、ハイデガーのもとで哲学の助手を務めていた。バーデンの帝国地方長官ロベルト・ヴァーグナーの1933年10月の決定により、大学を追われることになり、イギリスのケンブリッジに亡命した。ハイデガーの弟子マックス・ミュラーの報告によれば、この時ハイデガーはイギリスに手紙を送り、彼の受け入れを助けたという。Bernd Martin, *ibid.*, S. 105, S. 115を参照されたい。
- (29) もちろんわれわれにとって、「力への意志」というニーチェ的原理から民主主義と共産主義とファシズムを同一の水準においてとらえようとするこうしたハイデガーの叙述は、おのれのナチ加担を隠蔽するだけでなく、ファシズムのもつ犯罪性とそれへの自らの加担をなんら踏まえることなく、これを民主主義と同一視している点で、きわめて問題である。これについては、ロックモアを参照されたい(Rockmore, *On Heidegger's Nazism and Philosophy*, California University Press, p. 96. ロックモア『ハイデガー哲学とナチズム』, 奥谷浩一・小野滋男・鈴木恒夫・横田栄一訳, 北大図書刊行会, 132頁)。
- (30) 厳密に言えば、ハイデガーが「力への意志」というニーチェ的観点から、ユンガーなどからの影響を織り込んで、近代技術の支配が西洋の形而上学の根源をなすのだという把握に至り、そして「形而上学の克服」を課題として掲げるとともに近代西洋的思考からの根本的転換ともいうべき「もうひとつの始元」を追求するようになるのは、ハイデガーが1936年にニーチェ講義を開始して、ニーチェとの対決を行うようになってからである。したがって、その意味ではハイデガーは時間的順序を逆にして自らの思想的発展を描いているのであって、こうした描き方もまた、ナチズムと近代技術の支配とを同列におくことによって、自らのナチ加担を中和させると同時に、近代技術批判を自らのナチ「批判」へとすり替えることをきわめて容易にしている。ハイデガーが自ら敷いたこの路線にまったく無批判に追従して、ハイデガーにナチズム批判があることを示そうとしたきわめてナイーヴかつ無謀な試みがSilvio Vietta, *Heideggers Kritik am Nationalsozialismus und an der Technik*, Max Niemeyer, 1989 (シルヴィオ・ヴィエッタ『ハイデガーの国民社会主義と技術への批判』)にほかならない。これについては、本稿の訳者解説の注(8)に掲げた私の批判論文を参照されたい。
- (31) もちろん、第一次世界大戦および第二次世界大戦の原因を「力への意志」というとらえどころのないものに帰することによって、戦争にかんする国家的責任とナチ運動の一翼を担ったおのれの責任とを最終的には運命のごときものへと転化して免罪しようとするこうしたハイデガーの論法には、われわれはとうてい賛成するわけにはいかない。
- (32) ここでもハイデガーは、ナチ革命の成功とその否定的結果にかんする責任を当時のドイツ知識人全

体に転化して、アクティヴに行動して罪を犯すことに加担しなかった人々にも「本質的な不履行」という罪をなすりつけ、両者を同じ罪人とすることでおのれの政治責任の隠蔽を企てている。これが居直りの論理でなくて何であろうか。

- (33) この言葉とは裏腹に、ハイデガーが学長時代に行ったことは、大学内の制度改革に関連しては大学において「指導者原理」を貫徹したことであり、大学外においてはナチ大学教官を中軸とするさまざまな全国的な諸組織の創設と支援であり、学生に対してはナチ突撃隊と深い関係をもっていたナチ学生同盟を初めとする学生諸団体の活動およびナチ革命へと学生を駆り立てることであった。その記録文書のうえでの確実な証拠にかんしては、Schneeberger, Nachlese zu Heidegger, Bern, 1962 (邦訳は、シュネーベルガー『ハイデガー拾遺』, 山本尤訳, 未知谷) を参照されたい。
- (34) これについても、注(22)に述べたように、ハイデガーがたとえ「政治科学」の理念に反対したことが事実であったにしても、彼がナチズムそのもの、あるいはその根本的原理と教義に反対したことを決して意味しはしない。
- (35) この叙述については、上記注(25)を参照されたい。
- (36) これも虚偽である。ハイデガーは、フライブルク大学学長として、フライブルク地区と文部省があったカールスルーエを中心とするバーデン州地方においては、さまざまな党要人と知己であったし、祝典や集会・講演会などのさまざまな機会に彼らと列席していたことが、シュネーベルガーが集めた資料から了解される。ここでは例えば、ファリアスが指摘するように、チナ系新聞『アレマン人』の発行にかかわり、ナチ親衛隊大隊長でもあったフライブルク市長フランツ・ケルバーとハイデガーが長く密接な関係を続けたこと、学長辞任後も帝国文部大臣ベルンハルト・ルストともたえず友好的な関係があったこと、そしてハイデガーが学長時代に少なくとも3回はヒトラーにたいして電報を打電していることだけを指摘しておこう。
- (37) ナチ特有の言い回しで飾り立てられたハイデガーのこの学長演説は、彼が述べているように、「知と学問の本質の解明」ではまったくなくて、大学全体を「統制」すること、すなわち反対者を排除してナチの指導者原理を大学内に貫徹させ、学問の自由や学部自治を廃して全体主義的国家のために教授団と学生団とを総動員することと呼びかけた演説にほかならなかった。ウォーリンによれば、「彼が演説のなかで強調しているさまざまな結合—労働奉仕・防衛奉仕・学問奉仕の目的は、さまざまな能力の(近代的な)専門分化がなくなり、ドイツ民族の歴史的—精神的命運の実現という共通の目的の下にすべての営みが統合されるような、全包括的な全体国家の創造であった。」(Richard Wollin, *The Politics of Being*, Columbia University Press, p. 88. ウォーリン『存在の政治』155頁) またファリアスによれば、ハイデガーはこの学長演説以外にもハイデルベルク、キール、チュービンゲンなどでも講演を行ったが、「ドイツの大学の『革命化』を訴えるハイデガーのいくつもの講演が教師と学生だけに限って、学問的な研究には立ち入っていない。」(Farias, p. 182. ファリアス182頁)
- (38) これも虚偽である。オットによれば、防衛奉仕または国防奉仕という言葉は、当時の社会的文脈のなかで見れば、ドイツの大学では珍しい言葉ではなく、ドイツ民族にとって屈辱的なベルサイユ条約という状況のもとで、民族の国防強化は「鉄兜団」を初めとする武装学生または軍事教練連盟の合言葉であり、とりわけ1933年にはまぎれもないナチスのスローガンであった。それはまぎれもなく、軍隊的・攻撃的意味をもっていた。
- (39) これも虚偽である。ヒッポリュトスによって伝えられているヘラクレイトスの断片53は、「戦いは万物の王であり、万物の父である。それはある者を神とし、ある者を自由人とした。またある者を奴隷とし、ある者を自由人とした」というものである。素直に解釈すれば、戦争によって獲得した捕虜を奴隷として売買することが普通の習慣であった当時であって、ここでいう「戦い」はやはり戦争でもあり、闘争でもあって、ハイデガーの言うようにたんに争いまたは対決などとは理解されない。もちろん、闘争の原語である Kampf は、ヒトラーの『我が闘争』との関連を否定できないばかりか、学長演説で用いられているそのほかの「進軍にとつての歩行法則」「進軍」「統率と服従」などの用語もすべて軍隊用語である。こうしたことはすべて、ユンガーの言うような「総力戦」「総動員」「労働者の武装」などといったナチ的・突撃隊的スローガンの射程のなかを動いている。さらに、この演説では『戦争論』の著者クラウゼヴィッツがわざとらしく引用されているほか、「国際機関」にたいする誹謗がなされているのも注目に値する。注(60)を参照。
- (40) すでに述べた理由から、「戦争好きを哲学的に正当化している」のは、むしろハイデガー自身の学長演説にほかならない。
- (41) このギリシャ語の部分のハイデガーによるドイツ語訳は、きわめて強引なこじつけであって、とうて

い容認できるものではない。訳注(39)を参照されたい。

- (42) ギリシャ語のポレモスとデイクニュナイ、ポイエインとのあいだには、そのそれぞれの語源から言っても、その意味からしても、もともとはいかなる関連も存在しない。語源学をも意味論をも踏まえることのないこうしたハイデガーの恣意的な方法は決して許されるものではない。もしもこうした方法が許されるとすれば、いかなるギリシャ語についても、いかにようにも解釈できることが許されることになり、恣意的に解釈できないことはまったく存在しないことになってしまうであろう。
- (43) 学長演説は人々によって理解されなかったとハイデガーは嘆いているが、事態は決してそうではなかった。ファリアスによれば、ハイデガーの学長演説は官公庁、ナチ政権の信奉者、ナチ党の機関紙、ナチ学生同盟の機関紙などによって、当時の他の学長演説よりもはるかに闘争的で大学変革に対する最も重要な貢献であると見なされていた。一例だけあげれば、歴史学者でありナチ突撃隊員であったリヒアルト・ハルダーはこう述べたという。ハイデガーの学長演説は「闘争演説であって、固い決意をもって時代のなかに身を乗り出した者の哲学的呼びかけであり、大学を真剣に考え、学問に真っ向から対決したもの、真の簡潔さと固い意志と大胆な不敵さをもってなされた真に政治的な宣言である。」(Farias, p. 119. ファリアス143頁) さらに、皮肉なことに、クリークの雑誌『生成する民族』には1934年になってもなお、ハイデガーの学長演説を礼讃する論文が掲載されたし、そのほかにも Schneebberger, Nachlese zu Heidegger (シュネーベルガー同上書) に収録された学生団などの反応を参照されたい。
- (44) これが虚偽にはかならないことは、前注(43)を参照されたい。
- (45) オットー・ヴァッカーは、1933年4月にナチ政権によって特別に任命されてバーデン州の文部大臣となり、1940年まで文部大臣を務めたあと、ベルリンに戻って帝国教育省の単科大学(ホッホシューレ)政策の部門責任者を務めた。
- (46) 「コップフ」とはフライブルクにあったホテルの名称である。
- (47) グスタフ・アドルフ・シュール博士は、この当時ナチの大学区学生指導者であったが、後に帝国学生時指導者、そして帝国大学教師指導者にまで昇進した人物である。当時は、上述のシュタインとともに、ハイデルベルクのナチ・グループを指導していた。
- (48) シュタイン博士とは、ヨハネス・シュタインのことで、後にハイデルベルク大学の内科医学の教授となった。彼は、エルンスト・クリークの信奉者でもあり、当時ハイデルベルク大学のナチ関係者を管轄していた。
- (49) エルンスト・クリークは、小学校教師をしていたが、古くからのナチ信奉者であり、ローゼンベルクとのつながりでナチの重要人物にのしあがり、1932年にナチに正式入党して一度公職を解かれたあと、1933年にフランクフルト大学の教育学教授、同大学哲学講座の主任教授となり、さらに同年同大学学長に選出されている。そのちハイデルベルク大学の哲学教授をも務めた。彼のナチとしての経歴については、George Leaman, Heidegger im Kontext, S. 56を参照されたい。
- (50) オイゲン・フェーアレは、1933年3月以来ナチの一級事務官として、バーデン州文部省の大学部局の担当官を務めたのち、ハイデルベルク大学の民族学または古代哲学の教授になった。
- (51) この部分はハイデガーの弁明における数少ない事実である。少なくともこの2.の部分についてはハイデガーの記すとおりであったことは、オットが参照した前述のザウアーの日記によって証明されている。
- (52) 「ユダヤ人プラカード」については、注(9)を参照されたい。学長ハイデガーがこうした措置を取ったことを事実として主張するためには、記録文書による証拠がなければならないのはもちろんのことである。
- (53) しかし、残念ながらハイデガーの学長時代の事実としてわれわれが確認できるのは、その逆のことである。つまり、ハイデガー自身が「粛清行為」に関係したいくつかの事件の存在が記録文書により明らかにされたのである。ここでは、例えばシュタウディングー事件とバウムガルテン事件をあげておこう。ファリアスとオットによれば、ハイデガーは1933年9月29日、バーデン州高等教育審議官フェーアレに対し、後になってノーベル賞を受けた世界的に有名な化学者であり平和主義者でもあったヘルマン・シュタウディングーにかんしてたんなる噂をもとに政治的にかなり問題のある情報を提供し、これを受けてフェーアレはフライブルク警察に告訴した(シュテルンハイム作戦)。その後ハイデガーはシュタウディングーの免職処分を当局に提起したが、文部大臣から国務省にたいして行われた公職追放の提議は、同氏が6ヶ月の監視下に置かれたのちに却下された。オットは、この陰湿な事件の原因がハイデガーのシュタウディングーに対する嫉妬という個人的な動機だと見なしている(Ott, S. 201~213. オット310~329頁)。バウムガルテン事件とは、ハイデガーが1933年12月16日にゲッティンゲンのナチ大学教師連

- 盟 NSLB 宛に、マックス・ウェーバーの甥にあたるエドゥアルト・バウムガルテンにかんする所見を送り、彼が「マックス・ウェーバーを中心とした自由主義的・民主主義的なハイデルベルク知識人サークルを出自としている」ばかりか、「ユダヤ人フレンケルと活発な連絡をとった」と述べて、彼がただちにナチ党に入党することを避けるよう、進言した。翌年、このサークルの出身であるカール・ヤスパースはこの所見の写しを読んで、自由主義とユダヤ人に対するハイデガーの敵対的な態度と自分に対する裏切りのゆえに、彼に対する見方を決定的に変えることになった (Ott, S. 183-184. オット277-282頁)。
- (54) オットは、このハイデガーの言葉がきわめて陰險な意図を含んでいるとして、この件に特別に言及している。ハイデガーがナチ党員学長として、あたかも同僚たちの秘密と弱点を握っていて、彼らに対するさまざまな処置が画策されていたかのようなこの叙述は、きわめて陰險で謀略的な印象を与えるからである。なお、オットによれば、第一次世界大戦中にハイデガーは軍に招集されて、フライブルクの郵便査察部で勤務しており、「フライブルクではしきりに、検閲官マルティン・ハイデガーは重要な情報を入手できる立場にあり、とくに同僚たちの書簡を読むことができた、という憶測が流れた。」 (Ott, S. 85. オット122頁)
- (55) ケルバー博士とは、注(14)で述べた、メレンドルフの友人ベンダーが更迭された後のフライブルク市長フランツ・ケルバーのことである。彼は1930年にナチに入党し、親衛隊員でもあり、のちにヒムラーから親衛隊大隊長に任命されている。そして、ナチ系の闘争新聞『アレマン人』の編集長を務め、ミュンヘンでのヒトラー一揆に参加したナチ運動のアクティヴとしても悪名高い。また彼は、帝国議会議員でもあった帝国地方長官ロベルト・ヴァーグナーによって、1933年4月10日に、ベンダー罷免後のフライブルク市長に任命され、1945年までこの地位にあったが、同年変死した。彼とハイデガーとは終始親密な関係にあったといわれる。
- (56) ハイデガーが「大学の利害のために」ナチに入党したということも、彼が学長時代とその後にも「決して党の仕事を引き受けたり、何らかの党活動をしたりしない」という条件を守ったということも、まったくの偽りである。すでに1933年2月にハイデガーはクリークらとともに「ドイツ大学教師文化政治研究集団」の創設のための仕事に加わっていたし、「ナチ大学教師連盟」の創設以来のメンバーであり、学長時代には「ドイツ大学連合」内部の「統制」のために闘争したほか、学長辞任後も「ドイツ帝国・大学教官アカデミー」の創設のための仕事をしたし、「ドイツ法律アカデミー」の法哲学委員会に所属し、さらに「ドイツ政治大学」でもヘス、ゲッベルス、ゲーリング、ローゼンベルクらのナチ幹部とともに講義している。
- (57) ハイデガーがローゼンベルク当局から警戒の念をもって見られ始めたのは、1936年になってからである。たとえそれが監視であったにしても、このことは、帝国文部大臣ルストがハイデガーに寄せていた好意もあって、決してハイデガーの党活動を妨げるものではなかった。
- (58) ハイデガーが学長選挙後にナチに入党したことが決してたんに「形式の問題」に矮小化されてはならない。繰り返す述べるが、ハイデガーの入党は、ナチの「指導者原理」をフライブルク大学において貫徹しようという戦略の最初の第一歩だった。このことは、ナチ党員学長ハイデガーの働きがナチ当局によって一定程度認められて、例えば1933年10月1日にハイデガーが初めて「指導者=学長」に任命され、これ以後学長権限が一挙に彼の手に集中していったことを見ても明らかである。
- (59) これも虚偽である可能性が強い叙述である。オットによれば、ハイデガーは大学基本法の改正の仕事をバーデン州文部省と協力して進めており、1933年10月をもって成立したこの法律は、学長職に学部長任命などの権限を集中する「指導者原理」を大学に貫徹するというものであったが、オットによれば、改正されたこの「法の前文はハイデガーの精神に則ったものであり、彼のことばで書かれたといっている。」 (Ott, S. 192. オット294頁)
- (60) これも虚偽である。ハイデガーがハイデルベルク大学で行った講演のテーマは「新しい帝国の大学」であり、ファリアスによるその抜粋の引用によれば、ハイデガーは「ヒューマニズムやキリスト教の考えによって窒息させられることのないナチズムの精神を体し、こうしたことに抗して仮借なき闘争がなされねばならない」、「闘争は民族の宰相ヒトラーが実現する新しい帝国の諸勢力を結集して行われる」と述べた (Farias, p. 200-201. ファリアス174-175頁)。この講演はヤスパースも聞いて驚いたという。
- (61) これも虚偽である。ハイデガーはこの叙述とはまったく相反する立場で行動したことについては、注(37)(56)(63)を参照されたい。
- (62) 1933年6月8日にエルフルトで学長会議が開催されたこと自体は事実であるが、その会議の内容やハイデガーのこれに対する態度は事実とはまったく異なっている。ファリアスによれば、ハイデガーとフランクフルト大学学長クリークらは、自主的に「統制」を行ったドイツ大学同盟がなお不徹底な組織で

あるとして、その指導部内の反対派をさらに排除していっそう過激な組織と構成にするために活動しており、学長会議をもこうした過激化のために利用しようとしていた。ハイデガーが肩入れしていたドイツ学生連盟は、ドイツ大学同盟が自らに敵対していることを理由に、ドイツ大学同盟が予定していたヒトラーとの話し合いを、「統制」が完了するまでのあいだ延期するようにと働きかけていた。ハイデガーがヒトラーにあてて打電した電報はこうした関連で理解されるべきである。「ドイツ大学同盟理事会との計画中の話し合いの会を、大学同盟指導部においてとくに必要な統制が完了する時点まで延期されますよう要請致します。フライブルク大学学長ハイデガー。」(Farias, p. 165. ファリアス184~185頁) 先の学長会議では、ハイデガーらの働きかけが効を奏さず、ヒトラーとの会合とドイツ大学同盟との連帯が決議されたため、ハイデガー、クリーク、キール大学学長ロタール・ヴォルフ、ゲッティンゲン大学学長フリードリヒ・ノイマンが席を蹴って退場したと伝えられている。

- (63) ハイデガーがここで述べている大学の「ある種の再生」とは、学部教育活動の細分化・専門化に対抗して「諸学部の本質と大学の統一」を救い出すことであるが、しかし、このことは実際には反対派を排除した強制的な同一化・画一化によって大学を全体主義的な国家的統制のもとに置くことにほかならなかったことは、ハイデガー自身の「大学は…再び民族共同体の中に組み入れられ、国家と結び付けられねばならない」(ハイデルベルク講演)という言葉に見られるとおりである。レーム肅清以前に権勢を振っていた帝国学生指導者オスカー・シュテーベルが述べている一例だけを引けば、「ドイツ学生団および専門学校学生団が帝国中央本部に統合していることを踏まえて、このことがドイツの教育制度の壮大な統一への第一歩になる」「専門学校は、今日、さまざまな種類があり、統一されていないが、それを学生団のように組織することができるなら、専門学校全体を体系的にドイツの教育制度の中に組み入れることも難しくはない」(Schneeberger, S. 231. シュネーベルガー332頁)とあるように、ハイデガーもこの方向に歩調を合わせていたことがわかる。そしてまた、上記のことを可能にする「学部長のはりつけ」とは、具体的には、学部の自治と権限を剥奪して「指導者=学長」に学部長の任命権さえも集中させるということであり、これはハイデガーがカールスルーエの文部省と協力して行った「大学基本法」の改悪として実行された。要するに、ハイデガーが狙った「制度改革」とは、まさしく大学と専門学校をナチス国家の統制下におくことにほかならなかったのである。
- (64) これは虚偽である。1933年10月、指導者=学長ハイデガーは評議員・学部長・事務局長を伝命したが、ファリアスの調査によれば、ザウアー、メレンドルフ、ゼルゲル、シュペーマンを除く全員がナチ党員またはその心奉者であった。上記注(10)を参照されたい。
- (65) これも虚偽である。上記注(63)を参照されたい。
- (66) トートナウベルク合宿事件の真相については、オットに詳しい。ハイデガーはこの合宿の性格を「学問と学問的労働の本質にかんする私の観点を明確にするとともに開明市、言表するはずであった」と述べているが、これは虚偽にほかならず、実際は大学教官・学生・労働者の精神的信頼関係と政治的盟友関係を強化するために、ドイツ学生同盟の指導者会議でハイデガーが提起したものであった。そして、「突撃隊ないしは親衛隊の征服で、場合によっては鉄兜団の征服で」、しかもフランクフルトからトートナウベルクの間を徒歩行進で往復するという強行軍を伴っていた。ハイデガーは参加を許可された者に通達を与えているが、そのなかのひとつにこの合宿の目標が明示されている。それは「大学制度のナチズム的な変革の目標を鮮明に理解すること」(Ott, S. 218. オット337頁)であった。
- (67) キール大学は、ロタール・ヴォルフを学長にいただき、ドイツの諸大学のなかでもとりわけナチズムがさかんで、ナチズムの精神にしたがって大学を改革することにきわめて熱心な大学のひとつであった。
- (68) これも虚偽である。上記注(10)を参照のこと。
- (69) 医学部グループからフォン・メレンドルフを更迭するよう勧奨があったということは、事実として確認されはしない。また、ハイデガーがすぐ後で叙述しているように、文部大臣がフォン・メレンドルフを別の人物で置き換えるように勧奨したということも、文部省側の記録文書によるかぎり、事実としては存在しない。ハイデガーはここでもエリク・ヴォルフと並べて故意にフォン・メレンドルフの名前をあげることで、ナチに抵抗して抗議の意味で学長を辞任したとして自己演出しているのである。
- (70) 法学部からヴォルフにたいする憤懣と辞任要求が出ていたことは事実である。上記のように、ザウアーの日記からは、フライブルク大学法学部の教授で高位受勲者であるヴァルター・オイケンがザウアーを訪れ、同学部ではハイデガーが任命したエリク・ヴォルフのカリキュラム改革、つまり彼が突撃隊奉仕・国防スポーツ合宿などのいわば軍事教練科目を正規のカリキュラム科目として入れようとしたことにたいする憤懣が強まっていたことがわかる。この摩擦のために12月7日、ヴォルフはハイデガーに辞任を申し出た。指導者=学長であるハイデガーはこれに対して「指導者原理」を楯にとってこの辞表を

突き返したが、その後もヴォルフに対する苦情は後を断たず、文部大臣ヴァッカーは翌年4月12日付けの通達によって彼の更迭をハイデガーに勧告した。31歳の刑法学者ヴォルフは、ハイデガーの熱烈な崇拜者・忠実な追従者であり、「ナチ国家における正当な法」「ナチ国家の法理想」というふたつの論文を書いてナチに貢献しただけでなく、ハイデガーとともに突撃隊奉仕・国防スポーツ合宿などの軍事教練科目を法学部のカリキュラムに強引に入れようとしたために、法学部内で激しい非難を受けて孤立状態にあった（Ott, S. 227～229. オット350～352頁）。ナチ当局でさえこうした事態を放置することができなかったというのが、彼の罷免要求の理由であろう。

- (71) ハイデガーは後になって、元ベルリン大学学長オイゲン・フィッシャーのとりなしによって、「せせら笑い」を浮かべていたはずのシェールの援助を乞うことになる。ハイデガーは、ドイツ敗戦の色濃い1944年10月18日、総統令によって民族突撃隊に招集されたが、学長時代に過激な言動をもって学生や若い講師たちを突撃隊および戦争へと駆り立てたハイデガーは、こうした自らの言辞をかなぐりすてて、「防衛奉仕」どころか、医者や診断書をもって除隊を認めさせるという自己保身の行動に出たのであった。オットによれば、その過程のなかで、フィッシャーは、ハイデガーが属していた哲学部の依頼で彼に代えて自分を招集するようにと、今や帝国大学教師連盟会長にしてザルツブルク大管区指導者にまで出世していたシェールに手紙を書いた。ハイデガーに「せせら笑い」を浮かべていた人物に、はたして彼の救済を依頼することができるものであろうか。しかも、シェールはこの依頼を受けてハイデガーのために尽力することを約束したのである。ハイデガーは自分とシェールとが敵対関係にあったように装っているが、実際はかなり懇意な関係にあったと見るべきである。
- (72) これはまったく根拠のない責任の転嫁とあてこすりである。ファリアスとオットが証明したように、ハイデガーの学長辞任の真相は、「指導者＝学長」の原理のもとに大学全体を突撃隊化しかねないハイデガーのきわめて過激な路線が大学内の支持を失って孤立させられ、彼が頼みの綱としていた学生団体からも「服従」どころか裏切られたほか、「ドイツ大学帝国連合」の指導者となるという野望も潰えるなど、主として彼が企てた目論みがことごとく挫折し、失敗に終わったことにあり、ヴォルフ更迭は彼の辞任の口実または方便に過ぎなかったという可能性が強いのである。
- (73) これは事実である。バーデン州文部大臣ヴァッカーの記録文書によれば、大臣はむしろハイデガーが学長を継続してヴォルフ更迭後の大学運営にあたってほしいと望んでいたようであり、哲学者として名声がありナチ党員学長でもあるハイデガーとのあいだに抗争があると報道されることの影響を心配していたと思われる。
- (74) これも事実である。ハイデガーは後任の学長祝賀会への出席を拒否した。
- (75) これは、1938年6月9日に同じタイトルで講演として述べられたもので、1950年になってこれに講演では述べられなかった補遺を付して『世界像の時代』として初めて出版された。
- (76) この箇所は、「権力を掌握した運動」のうちに依然として「はるかなる射程距離のあるもの」を認めていて、そのために学長職を引き受けたことが決して否定されてはならないと述べているのだから、ハイデガーの居直りを示すものでしかない。ハイデガーは依然としてナチ時代を含めて自分の行動を正当化することに固執しているのである。
- (77) われわれがニヒリズムの完成の真っ只中にいて、ニヒリズムの克服が告げ知らされているのに、ドイツ人がこれを洞察しておらず、自分だけが歴史の真理を洞察しているというこの叙述は、ハイデガー特有の独善性と秘教性を明確に示している。
- (78) ここでハイデガーは、「力への意志」なる抽象的な原理をもちだして、自分の学長職の誤りを詮索することはどうでもいい、取るに足らないつまらないことだとして、自分にかんする歴史的探究を禁ずるとともに、居直っている。
- (79) この日、ナチのナンバー2で突撃隊長のエルンスト・レームほか、その幹部がいつせいに殺害または投獄されて肅清され、ヒトラーがナチ党内部で主導権を握り、ナチ党はこれ以降これまでの大衆的・行動主義的・社会主義的路線から独占資本との妥協路線へと転換することになる。これまで突撃隊の影響力の強かった学生団体もいつせいにその組織編制の変更を迫られたが、これと深い関係をもち続けたハイデガーがこのレーム肅清をどう受け止めたかはよく分かってはいない。しかし、ハイデガーがこの日を境にしてナチとははっきりと距離を取ったかのような叙述は、虚偽である。彼は1942年になってなお「国民社会主義の歴史的無類性」（『ヘルダーリンの賛歌“イスター”』）を語り、「ドイツ人が、そしてドイツ人こそが西洋の歴史を救済しうるのである」（『ヘラクレイトス講義』）と述べ、そして1945年の敗戦時までナチ党員であり続け、党費を払い続けたからである。
- (80) ハイデガーの後任のフライブルク大学学長は確かにナチ党員の刑法学者エドゥアルト・ケルンであっ

たが、「フライブルク大学最初の国民社会主義的な学長」は誰だろう、ハイデガーその人であったことは否定しえない事実である。世界的な哲学者がここまで自分のことを棚にあげて平然としていることができるものであろうか。

- (81) ボイムラーは、ドレスデン工科大学の哲学・教育学の教授であったが、1932年7月の帝国議会選挙でナチへの投票呼びかけ人に名前を連ねた頃からナチへと接近し、ハイデガーと同じ日に入党、ベルリンの政治教育学研究所長を務めたほか、ローゼンベルク局の学術専門部局長をも務めた。哲学関係では、ニーチェの研究者として知られ、ニーチェの遺稿『生成する無垢』の編集の仕事があるが、ニーチェ解釈をめぐるのはハイデガーと対立していた。また彼は、『教育』および『世界観と学校』などの雑誌をも編集していた。
- (82) アルフレート・ローゼンベルクはリガ工科大学を卒業したあと、エッカルトの仲介でヒトラーに接近し、雑誌『フェルキッシュ・ベオバハター』の主筆となり、ナチス党の代議士および外交部長として活躍した。彼の『20世紀の神話』は1936年末までに50万部を超えるほど読まれ、彼の事務局はナチ党の教義が守られているかどうかという立場から当時のナチ知識人たちの活動を監視する役割をもはたしていた。
- (83) ガダマーは1900年に生まれ、1922年にマールブルク大学のナトルプのもとで学位を取得したが、翌年同大学に招聘されたハイデガーから圧倒的な影響を受けて、彼の最初の弟子としてレーヴィットらとともにハイデガー・サークルを形成する。1929年に教授資格を取得したあと、長く私講師時代を続け、1937年になって初めてマールブルク大学員外教授となり、翌年ライプツィヒに移り、正教授となる。ナチとの関連では、1933年にナチ教師同盟に加盟し、同年11月1日にはハイデガーやG.クリューガーらとともにヒトラーとナチ国家への忠誠を誓う署名人に名を連ねている (Leaman, S. 40~41)。
- (84) ゲルハルト・クリューガーは1902年に生まれ、マールブルク大学で私講師を務めたあと、1933年からフランクフルト、マールブルク、ゲッティンゲンの各大学で委嘱講義を行い、1938年にマールブルクで員外教授、1940年にミュンスターで正教授となる。1933年にナチ教師同盟、1934年にナチ親衛隊に入り、ドイツ学生団でも指導者として活動していた (Leaman, S. 57)。
- (85) ブレッカーは1902年生まれで、1933年11月以来、ヴェルナー・ブロックがイギリスへ亡命したあと、フライブルク大学の哲学ゼミナールでハイデガーの助手を務め、ギリシャ哲学を専攻する。1935年になって教授資格を取得、1937年からロストック大学で講師・教授となり、ナチ・ドイツ講師同盟の活動をへて、1940年にナチ党に入党する。当初はハイデガーの推薦の辞を付して出版された彼の『アリストテレス』は1974年に第4版を出し、そのほかにも古代哲学を中心に多くの著書がある (Leaman, S. 33~34)。
- (86) ハンス・ハンケにかんしては、ファリアスによれば、確かにナチ黨員ではあったが、ベルリン・ドキュメント・センターにある彼の黨員記録を見ると、秘密情報機関のスパイなどではなかったという。
- (87) カール・ラーナーとヨハネス・ロットは、ロットによれば、インスブルックの修道会から派遣されて博士号を取得するためにフライブルク大学で学んでいたが、ハイデガーのもとではなく、キリスト教哲学講座のマルティン・ホーネッカーのもとでそうしたという。当時のハイデガーは、博士取得候補者としてイエズス会士を受け入れるはずがなく、副査としてのみ彼らの博士論文を審査したにすぎなかった。ハイデガーがユダヤ系学生をも受け入れなかったことについては、彼の弟子マックス・ミュラーの証言がある (Martin, S. 105~106)。
- (88) ハインツ・ボリンガーは、マックス・シェーラーで学位を取得した、ホーネッカーの弟子であり、師の亡きあと、改変された講座で低い地位で活動していた。カトリック青年運動の出身であり、同盟「新ドイツ」に属してもいた。1943年3月に「白バラ」グループに属していたとして逮捕され、重い懲役刑に処せられた。彼の友人ヴィリ・グラーフは、ミュンヘン大学のフーバー教授やショル兄妹とともに処刑された。
- (89) この叙述をそのまま受け入れれば、まるでハイデガーが「白バラ」とかわりがあり、彼があたかも反ナチ抵抗の闘士でもあるかのような印象を与えかねないであろう。ここでも、ハイデガーは虚偽を述べ、あるいは事実を誇張するなどの手段を用いて、ナチが攻撃と弾圧の対象としていたカトリック勢力と自分とを接近させることによって、自分とナチとの離反を読者に印象づけようとして、巧妙に演出している。ロットによれば、逮捕され尋問されたボリンガーの周辺がゲシュタポの手によって搜索されたが、ハイデガーは彼の学位論文の副査であっただけで、つぶされたホーネッカーの講座との離反のゆえに、そしてさらにハイデガーの思想傾向のために、この事件で煩わされる必要はまったくなかった (Ott, S. 265~267. オット412~414頁)。オットとファリアスは、この件で存命中のボリンガーに問い合わせを行い、彼から証言と手紙とを受け取っているが、それによれば、ゲシュタポの尋問ではハイデ

ガーの名前はいっさい出ておらず、白ばらグループもボリンガーのグループにもハイデガーと関係ある者は一人もなく、ハイデガーがあげているシューマッハーやグッゲンベルガーという人物もまったく心あたりがない、とのことである。

- (90) 確かにハイデガーが名前をあげている初期の3人の弟子たちは教授昇進が遅れたことは事実であるが、このことが、ハイデガーが言うように、ナチとの対立とそのための監視の結果であったとはいえないであろう。例えば、ハイデガーの名声にもかかわらず、彼の基礎的存在論とニコライ・ハルトマンの存在論とは基本的に対立していたし、現象学やハイデガーとヤスパーズの実存哲学を拒否する哲学者たちも多数存在したのであって、ハイデガーの哲学およびその学派といえども当時の哲学者たちによってただちに受け入れられたわけではなく、こうした当時のドイツ哲学界の複雑な事情も考慮しなければならない。
- (91) これは今までのところ、記録文書によって証明されてはいない。
- (92) これもまた虚偽である。ハイデガーのカント書『カントと形而上学の問題』は1929年にその初版が刊行されたのち、その第2版は22年後の1951年に刊行されているから、事実として確認されるのは、この時期にカント書の第2版が刊行されなかったということだけである。1941年には『ヘルダーリンの賛歌“祭りの日のように…”』が刊行され、1942年には『プラトンの真理論』が『精神的伝承年報』第2巻に掲載された。そのほかにこの年『存在と時間』の第5版が、初版からあったフッサールへの献辞を削除して、出版された。1943年には『真理の本質について』が刊行されたし、『形而上学とは何か』第4版もハイデガーの「後書き」を付して刊行された。1944年には『ヘルダーリンの詩の解明』が出版され、これには1937年刊行の『ヘルダーリンと思索の本質』と前年ヘルダーリン死後100年記念祭で行った講演「帰郷」が同時に収録された。「出版社が必要な紙を用意していた」という点について言えば、これは確かに一部は記録文書と符合する。しかし、その内容はハイデガーの言うところとはまったく逆である。ファリアスの調査によれば、ベルリン・ドキュメント・センターには、1944年1月、用紙不足のために出版が極度に制約された状況にもかかわらず、プロイセン文部省がハイデガーの著作を印刷するために、ヴィットリオ・クロスターマン社に無条件で用紙の配給をしたことを示す一連のメモがあるという。
- (93) ハイデガーが外国から講演の招待を受けながらこれを断ったのは、戦局が悪化したという単純な理由によるものであろう。
- (94) ファリアスによれば、プラハ国際哲学会議に参加したドイツ代表団の主要なメンバーには、ニコライ・ハルトマンのほか、マルクス主義の影響を受けた社会学者のテンニース、ユダヤ系のカール・レーヴィット、そして一人のイエズス会士もまた含まれており、ハイデガーのみならず著名なナチ哲学者は一人として参加していないことから了解されるように、ナチ当局はプラハ国際哲学会議にはほとんど関心をもっていなかったか、あるいはこれらの非ナチ的な哲学者たちがそれをいいことにナチ系の人物を意図的に排除していたと推測される。
- (95) われわれにとっては、ハイデガーの叙述のうち nachträglich（「後になって」、または「補足的に」）という言葉が特別に関心を引く。ファリアスによれば、ハイデガーはパリの国際デカルト会議が開催される以前の1935年にその参加準備のためにパリを訪れており、「この会議は、意識的に現在支配的な自由主義的＝民主主義的な学問観を押し付けようとするものであって、これに対抗する強力なドイツ代表団を早期に結成するように」と早くから帝国文部省に働きかけていた。ところが、当局のこの件にかんする処理が遅れ、会議開始一ヵ月半前になってハイデガーを代表団に加え、しかも代表者は上記のような戦術を提起した彼ではなくて、ハンス・ハイゼであった。おまけに、プロイセン文部省がハイデガーをフライブルク大学哲学部長に推薦するという事件があり、こうした内紛と個人的反感がハイデガーがこの会議から手を引いた理由だとファリアスは推測している。ハイデガーの国際会議などへの出席は、1936年のローマの「ドイツ・イタリア学研究所」でのヘルダーリン講演をはじめ、数回にのぼっており、これらを見るかぎり、ハイデガーとナチ、とりわけベルリンとの良好な関係を示すものであって、その反対となる事例をあげることはきわめて困難である。ハイデガーは1935/36年にスイスのチューリヒに旅行しているし、1936年にもウィーン旅行を行っており、これらの旅行はすべて許可されたものであった。したがって、ハイデガーは党内で一定の批判を受け、その行動が一定の範囲内で監視されていたにせよ、海外旅行を含めて決してその行動を制限されてはいなかったのである。
- (96) ここにもハイデガーの不気味な歴史哲学と独善的な態度とがはっきりと示されている。

(おくや こういち 本学人文学部教授 哲学専攻)